

# 聖徒の道

10  
1994

末日聖徒  
イエス・キリスト  
教会





# 聖徒の道

1994年10月号



表紙——復活された救い主は、ニーファイの民に姿を現わされた時、「かれらの小さい子供たちを一人一人近よせてこれに祝福を与え、かれらのために御父に祈りたもうた。」(Ⅲニーファイ17:21)  
1994年1月、教会全体に向けた衛星中継による特別放送で、教会幹部が現代の子供たちに寄せる思いを語った。(本誌「汝らの子供たちを見よ」p.35参照。写真撮影/リチャード・M・ロムニー)

こどものページ——絵/ディック・ブラウン

## 一般

大管長会メッセージ——主は従うように招いていらっしゃいます 大管長ハワード・W・ハンター……………	2
ゴードン・B・ヒンクレー第一副管長 M・ラッセル・バラード……………	8
トーマス・S・モンソン第二副管長 ジェフリー・R・ホランド……………	16
10代の生徒を教える デブラ・レイシー……………	24
台風 小野紀子……………	30
「汝らの子供たちを見よ」 ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン M・ラッセル・バラード、マイカリーン・P・グラスリ……………	35
愛によって結び合わされ アナリース・プレント-ペリス……………	46

## 青少年

すべて真実だったので マイラ・メルセデス・ペレス・ローマン……………	26
闇から光へ——悔い改めの賜 ヘルベシオ・マーティンズ……………	32
父さん、ありがとう ジュリアン・ダイク……………	44
しっかり! カール・ピーターソン……………	48

## 定期特別記事

読者からの便り……………	1
家庭訪問メッセージ 霊的な成長——生涯にわたる務め……………	25

## こども

みたまのささやき リチャード・G・スコット長老……………	2
キャリーのせい約 スチーブン・アイバーソン作……………	4
分かち合いの時間——へいわをつくり出す人 ジュディ・エドワーズ……………	8
せかいのおともだち……………	10
おもちゃばこ……………	12
モルモン経物語—— しれい長かんモロナイ、セラヘムナをうちまかす……………	13

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ハワード・W・ハンター、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン  
 十二使徒定員会：ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーグス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド  
 編集長：レックス・D・ピネガー、ジョー・J・クリステンセン  
 顧問：ウィリアム・R・ブラッドフォード、スペンサー・J・コンディー、ジョン・H・グローバーク  
 教科課程管理部責任者  
 実務部長：ロナルド・L・ナイトン  
 企画・編集ディレクター：プライアン・K・ケリー  
 グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーク  
 機関誌グラフィックスディレクター：M・M・カワサキ  
 国際機関誌  
 編集主幹：マービン・K・ガードナー  
 編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン  
 編集副主幹：デビッド・ミッチェル  
 編集補佐/こどものページ：ディエーン・ウォーカー

ウオーカー  
 工程管理：メアリーアン・マーティンデル  
 アートディレクター：スコット・バン・カンペン  
 デザイナー：ジェリー・クック  
 制作：レジナルド・J・クリステンセン、ジェニファー・ダットワイラー、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー  
 予約購読スタッフ  
 購読管理ディレクター：B・レックス・ハリス  
 配送部長：クリス・クリステンセン  
 マーケティング部長：ジョイス・ハンセン、ケント・H・ソレンセン  
 聖徒の道 1994年10月号第38巻第10号  
 発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
 〒106東京都港区南麻布5-10-30  
 電話 03-3440-2351  
 印刷所 株式会社 リック/クロスロード  
 定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)  
 半年予約1,100円(送料共)  
 普通号150円、大会号350円

Copyright © 1994 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1992年10月 翻訳承認—1992年10月 原題—International Magazines October 1994. Japanese. 94990300  
 ●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。  
 ●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351 (代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

宣教師の道具

「リアホナ」(ポルトガル語版)はすばらしい機関誌です。その中には、靈的に弱っているとき、私を靈的に立ち直らせ、強めてくれるメッセージが記されています。毎月この本を通じて知識と証とが驚くほど増し加わっています。

大管長会の靈感あふれるメッセージをはじめ、さまざまな記事や証に感謝しています。それらは、私がイエス・キリストの福音の大切さを理解するうえで役立っています。

この本は非常に効果的な伝道の道具にもなります。私は、教会員でない友人の家族に教会とそのメッセージについて紹介する機会になればと、「リアホナ」をプレゼントしたことがあります。

私たちは、事情が許さざり、教会員でない友人に「リアホナ」をプレゼントすることをもっと真剣に考えるべきではないでしょうか。そうすれば、この本を受け取り、福音を受け入れた人々の生活の中に、「まことに珍らしき業と驚嘆すべき事」(II ニーファイ 27:26)を見いだす日が来るでしょう。

ブラジル、リオデジャネイロステキ部  
 ラモスワード部  
 エバンドソン・ルイス・デ・レモス

家庭の夕べのために

専任宣教師の私は、「リアホナ」(スペイン語版)を受け取ると、準備の日はその大半を読み、読めなかった部分は朝食や昼食の合間、あるいは個人の学習時間を利用して読んでいます。そこに記された記事は、伝道中の私を強めてくれるばかりでなく、あまり活発でない会員が再び教会に集えるようにするためのアイデアを与えてくれます。

今私は、伝道を終えて帰った時に教会員でない両親に読んでもらえるよう、以前に発行された「リアホナ」をでき

るかぎりそろえようとしています。そして私が将来家庭を築いた時、収集した「リアホナ」を用いて家族を教え導ければと思います。

パラグアイ、アスンシオン伝道部  
 パタニ長老

靈感あふれる言葉

教会員になってほぼ3年になります。何の問題もなく信仰生活を送れたわけではありませんが、教会員になった時から「デア・シュテルン」(ドイツ語版。「星」の意)は私の信仰の友となっています。教会の歴史と発展についてもっとよく学べるよう、多くの兄弟姉妹がこれまでに発行されたこの機関誌をくれました。特に、教会幹部の靈感あふれる言葉のおかげで私は鼓舞され、イエス・キリストの福音に対する証を強めることができました。

ドイツ、マンハイムステキ部  
 マンハイムワード部  
 ペテル・サバスキー

読まずにはられません...

「レトワール」(フランス語版。「星」の意)が郵便受けに届くと、何をしようとするかすぐに手を休めて読み始めます。それも隅から隅までです。いつもそうなのです。何をしているかにかかわらず、「レトワール」を読まずにはられません。

私の住んでいるディエップの町には3万7,000人の住民がいますが、教会の支部はありません。パリステキ部ルエンワード部の教会員に会える翌週の日曜日まで、「レトワール」は私の靈的な支えとなっています。

フランス、ディエップ  
 オリビア・モルーアー







# 主は従うように 招いていらっしゃいます

大管長  
ハワード・W・ハンター

何

カ月前、私は、神の戒めを守り、その祝福を最大限に受けようと努める教会員の皆さんに、ある勧めをしました。（「聖徒の道」1994年8月号、ローカルページp. 1-3参照）その勧めとは、すべての教会員が救い主の示された愛と希望と慈悲に学び、主イエス・キリストの生涯と模範に、これまで以上に注意を払って生活することです。

私たちは、互いにもっと親切にし、もっと礼儀を尽くし、もっと謙遜で、忍耐強く、赦し合えるよう求められています。私たちはお互いに対して高い期待を抱いていますし、事実、すべての人が進歩できるのです。世の人々は、神の戒めにそったもっと規律ある生活をするように、声を張り上げて要求しています。しかし私たちがそれを勧める方法は、主がわびしいリバティーの牢獄の奥で、予言者ジョセフ・スミスに語られたように、「説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛と……偽善にあらず奸智にあらず……ものによる」（教義と聖約121：41-42）のです。私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会で、自分の前に用意された祝宴の席に着き、その席を設けられたよき羊飼いに従うように努めることができます。

主が地上で恵みと導きを施されている間、たびたび人を召されましたが、それが同時に招きであり、チャレンジになっていました。ペテロとその兄弟アンデレに向



ペテロとその兄弟アンデレに向かい、キリストはこう言われました。「わたしについてきなさい。」（マタイ4：19）イエスは私たち一人一人にも、こう言っておられます。「もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。」（ヨハネ12：26）私に従いなさい、という主の招きは、私たち一人一人に向けられた個人的なものであり、心を揺り動かさずにはおきません。





THE SERMON ON THE MOUNT, BY HARRY ANDERSON; PHOTOGRAPH BY CRAIG DIMOND

かい、キリストはこう言われました。「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」(マタイ4:19) 金持ちの青年から、永遠の生命を得るためになすべきことを尋ねられて、イエスはこう答えられました。「帰ってあなたの持ち物売り払い、貧しい人々に施しなさい。……そして、わたしに従ってきなさい。」(マタイ19:21) そして、私たち一人一人には、こうおっしゃっています。「もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。」(ヨハネ12:26)

私に従いなさいという、主の招きは、私たち一人一人に向けられた個人的なものであり、心を揺り動かさずにはおきません。永遠にあいまいな立場を取り続けることはできません。(列王上18:21参照) だれもがいつかは、次のような重大な主の問いに直面します。「あなたがたはわたしをだれと言うか。」(マタイ16:15) 私たち個人の救いは、この質問にどう答え、どれだけその答えに献身できるかにかかっています。ペテロは、天からの導きを受けて答えました。「あなたこそ、生ける

神の子キリストです。」(マタイ16:16) 幾多の証し人たちが、聖霊の力によって、ペテロと同じ答えを述べています。私もへりくだり、感謝の心をもって、その証人の輪に加わりたいと思います。私たちは遅かれ早かれ、ひとり残らず、この質問に自分で答えなければなりません。終わりの日には、あらゆる者がひざをかかめ、あらゆる舌が「イエスはキリストである」と告白しなければならぬからです。問題は、永遠に手遅れになってしまう前に、この質問に正しく答え、それによって生活できるかどうかです。イエスはまことにキリストでいらっしゃいます。では私たちは何をしなければならぬのでしょうか。

キリストの至高の犠牲は、私に従いなさいという主の招きを受け入れたときにだけ、私たちの生活に完全な効力を発揮します。この呼びかけは、無意味でもなければ、非現実的なことでも、無理なことでもありません。ある個人に従うとは、その人物に目を注ぎ、熱心に耳を傾け、その權威を受け入れ、導き手として受け入れ、その命令を守ることです。また、考えを支持し、擁

すべての点で、またどのような境遇にあっても、神の御子に従いましょう。主を私たちの模範とし、導き手としましょう。キリストのようになるために、力の限りを尽くし、あらゆる努力を払わなければなりません。





護し、その個人を自分の模範とすることです。だれもが、このチャレンジにこたえることができます。ペテロはこう言いました。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。」(I ペテロ 2:21) キリストの教義と相いれない教えが誤りであるのと同じように、キリストの模範と相いれない生活も、やはり間違っています。そのような生き方で達成可能な行く末を実現することはできないでしょう。

まだ福音を受け入れていない人々にとって、キリストに従うとは、キリストについて学び、キリストの福音に従う必要があることを意味します。イエスご自身、福音をこう定義していらっしゃいます。

「さて、世界の隅々に至る者たちよ。汝らは聖霊を受けて聖められ、また終りの日にわが前に罪なしとせられんために今悔い改め、われに來てわが名によりてバプテスマを受けよ。これ汝らに与うる命令なり。」

われまことに、まことに汝らに告ぐ、以上はわが福音なり。わが教会に於てなすべきことは、汝らすでによく知れり。すなわち、汝らが見たるわが行いを汝らもせよ。これらのことは汝らも行うべきことなればなり。」(III ニーファイ 27:20-21)

正義はまず、一人一人の生活から始めなければなりません。さらに、家庭生活の中にも浸透させる必要があります。親はイエス・キリストの福音の原則に従い、それを子供たちに教える責任があります。生活の中に宗教を生か

す必要があるのです。イエス・キリストの福音は、あらゆる行動の動機に影響を与えるものでなければなりません。もっと主に近づこうと思うなら、救い主の示された偉大な模範に従えるよう、一層の努力が必要です。これは私たちの大きな課題です。

日々捧げる祈りが、次の賛美歌の歌詞にみごとに表現されています。

「さらに聖く  なお努めん  
汚れもなく  強くならん  
この世離れ  天を望まん  
われみ国に  ふさわしく  
主のごとくに  尊くならん」

(『さらに聖くなお努めん』賛美歌74番)

イエスはキリストであり、世の救い主であることを証します。キリストに対する証を得て、その教えに生活を従わせさえすれば、約束された喜びを見いだすでしょう。

ここでもう一度、世の救い主、神の御子ご自身が語られた、最も重要な問いについて考えてみましょう。新大陸の弟子たちは、主から教えを受けたいとしきりに願い求めました。その願いは、主が問もなく去って行かれるために、ますます強くなりました。その時主はこう質問されました。「汝らはいかなる人物にてあるべきか。」そして、すぐにこう答えられました。「われと同じ人物ならざるべからず。」(III ニーファイ 27:27)

世の中には、「私の言うとおりにしなさい」と言う人はたくさんいます。どのような問題についても、助言者に事欠くことはありません。しかし、「私のするようにしなさい」と言える

備えのできた人はほとんどいません。もちろん、正しく、またふさわしくそのように宣言できたのは、人類史上ただひとりです。歴史上、善男善女の例は多くありますが、最も優れた人でさえ何らかの欠点はあるものです。どんなに善意の人であっても、私たちが従うべき完全無欠な模範と見なされる人はひとりもいないのです。

キリストだけが、私たちの理想となり、「輝く明けの明星」(黙示 22:16)となることができます。キリストだけが無条件にこう言えるのです。「私に従ってきなさい。私に学びなさい。あなたがたが見た私の行ないをあなたがたもしなさい。私が与える水を飲み、私が与えるパンを食べなさい。私は道であり、真理であり、命である。私は律法であり、また光である。私にすがりなさい。そうすればあなたがたは必ず生きる。私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(マタイ 11:29; 16:24; ヨハネ 4:13-14; 6:35, 51; 7:37; 13:34; 14:6; III ニーファイ 15:9; 27:21参照)

なんとはいきなりと響きわたる呼び声でしょう。不確実で模範のない時代であって、なんと確実な模範でしょう。

エズラ・タフト・ベンソン大管長は、キリストの驚嘆すべき模範について、こう語られました。「約2,000年前、完全なお方であるイエス・キリストが地上におられました。……主の生活はすべての徳を実践し、完全な調和を保つものでした。人を自由にするための真理を教えた主の模範と教えは、人類に唯一の確かな道である偉大な標準を与





キリストに従うとは、キリストについて学び、キリストの福音に従うことを意味します。イエスご自身、福音をこう定義していらっしゃいます。「さて、世界の隅々に至る者たちよ。汝らは聖霊を受けて聖められ、また終りの日にわが前に罪なしとせられんために今悔い改め、われに来てわが名によりてバプテスマを受けよ。これ汝らに与うる命令なり。」(Ⅲニ一ファイ27：20)

えたのです。」(「エズラ・タフト・ベンソンの教え」p. 8)

偉大な標準、唯一の確かな道、世の光にしてまた世の生命。神が独り子を世に遣わし、ほかのだれにもできない、少なくともふたつの事柄を成し遂げてくださったことに、私たちは心から感謝しなくてはなりません。完全で罪のない御子としてキリストが行なわれた第1の任務は、墮落からすべての人を贖い、私たちが主を受け入れ主に従うならば、アダムとがの咎と自分の罪から贖われるようにすることです。第2の偉大なことは、すべての人類がどのように生活し、進歩すべきか、またより一層神に近づくにはどうしたらよいかを知るために、正しい生活、親切と慈悲、憐れみの完全な模範を示すことです。

すべての点で、またどのような境遇にあっても、神の御子に従いましょう。主を私たちの模範とし、導き手としましょう。どのような場面でも、「イエスならどうなさるだろう」と自問し、その答えに勇敢に従う必要があります。私たちは、言葉の最も純粋な意味において、主に従わなくてはなりません。主が天父のみ業をなされたように、私たちも主のみ業に携わるのです。初等協会の子供たちが『きみもぼくもエス様のようになりましょう』(「子供の歌」B-66)と歌うように、私たちも主に似た者となるよう努めなくてはなりません。かつてこの世が目にした唯一の完全で罪のない模範者キリストのようになるために、力の限りを尽くし、あらゆる努力を払わなければなりません。

主の愛する弟子のヨハネは、キリス

トについて、たびたび次のように言いました。「わたしたちはその栄光を見た。」(ヨハネ1：14) 働き、教え、祈る、救い主の完全な生活を目の当たりにしたのです。そのように、私たちもできるかぎりあらゆる方法で主の「栄光を見」る必要があります。

私たちは今まで以上に深くキリストを知り、これまで以上に頻繁に主を思い起こし、過去にも増して雄々しく主に仕えなくてはなりません。そうするのなら、私たちは永遠の命に至る水を飲み、命のパンを食べるようになるでしょう。

男女を問わず、私たちはどのような人物になるべきでしょうか。主と同じ人物になる必要があるのです。□

#### ホームティーチャーへの提案

1. 私たちは主イエス・キリストの生涯と模範に、もっと心に向けて生活する必要がある。

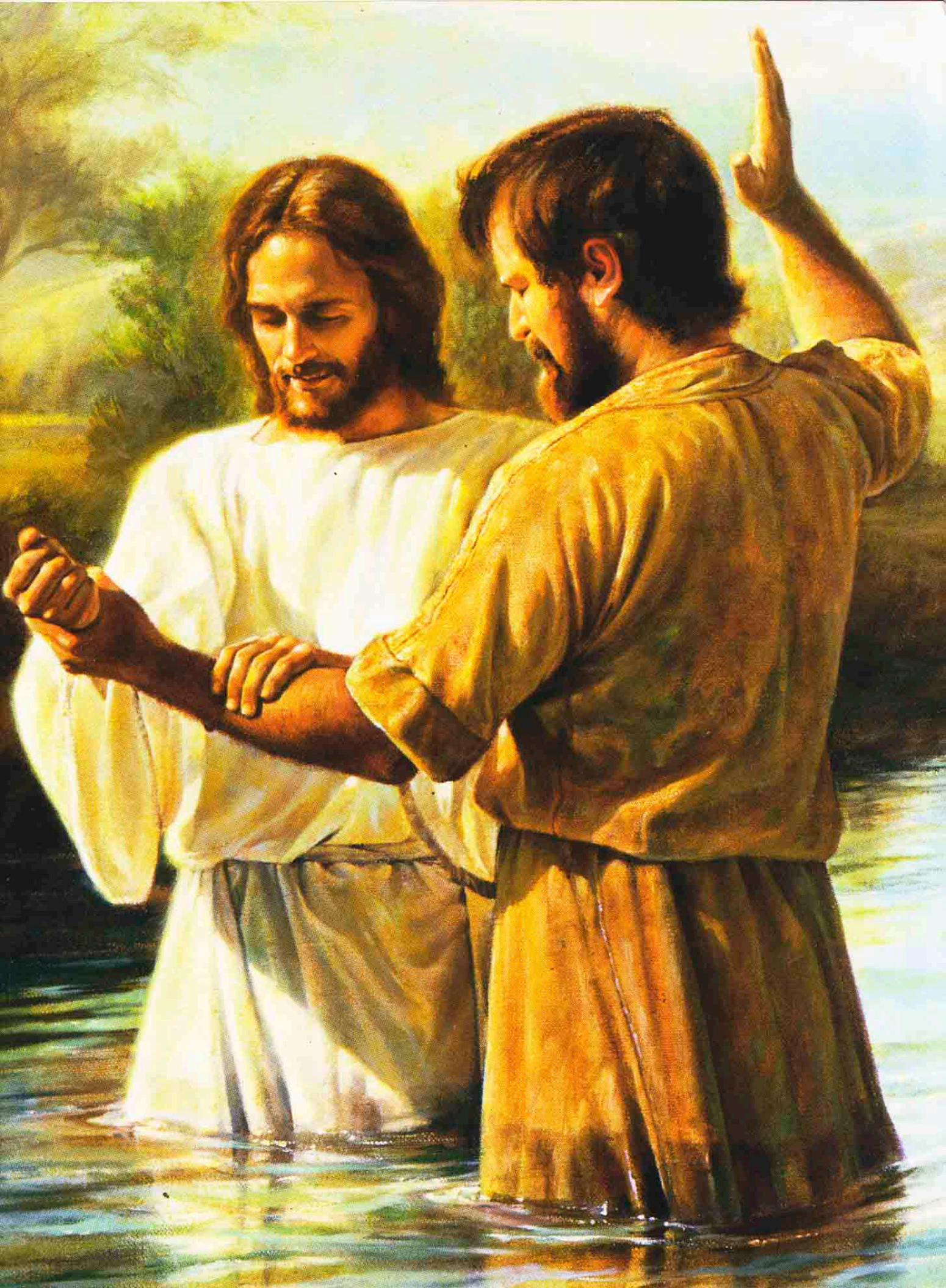
2. イエスはこう言われた。「もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。」(ヨハネ12：26)

3. キリストの至高の犠牲は、主に従いなさいという、主の招きを受け入れたときにだけ、私たちの生活の中で効力を発揮する。

4. あらゆる機会をとらえて、こう自問すべきである。「イエスならどうされるだろうか。」

5. 私たちはこれまで以上にキリストを知り、これまで以上に主を覚え、これまで以上に雄々しく主に仕えなければならない。



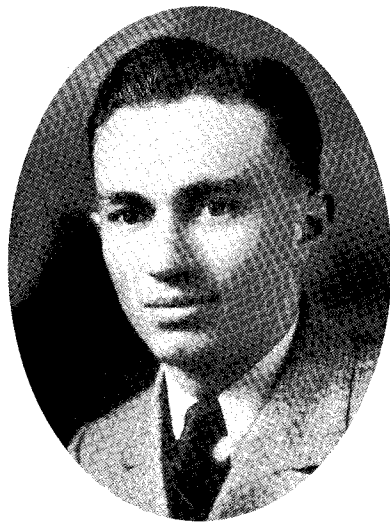




# ゴードン・B・ヒンクレー

## 第一副管長

十二使徒定員会会員  
M・ラッセル・バラード



宣教師時代(上)から、幹部としての約40年間、ヒンクレー副管長は献身的に、また人々への思いやりをもって奉仕してきた。

### 信仰の錨<sup>いかり</sup>

空には黒雲が立ち込め、今にも雨が降りだしそうなイギリス北西部の典型的な天気です。しかし、ゴードン・B・ヒンクレー副管長にとっては、1994年6月12日の日曜日は輝かしい日でした。副管長とともにイギリスのプレストンへ行った私は、彼の熱意を肌で感じました。副管長はプレストン神殿の歛入れ式を行なうため、61年前に伝道した地へ戻って来たのです。

伝道した当時プレストンに住んでいた、ガートルード・コーレス兄弟にあいさつした副管長の心には、なつかしさが込み上げてきました。ともに伝道した兄弟が聴衆の中にいるのを知ると、即座に1万人以上もいる群衆の中を走ってその人を捜し始めました。今は車いすで生活するロバート・ピクルズ兄弟を見つけると、涙があふれ出しました。身をかかめて兄弟を抱擁し、彼の手を握り締めながら語る姿を見ていると、長年の別離も彼の旧友への思いを消し去りはしなかったことが、はっきりとわかりました。

ヒンクレー副管長と少しでも一緒に時を過ごした人は、彼が情け深く、感情を素直に顔に出す人物であることがわかるでしょう。自分自身のことについて書くとする、きっと彼は自分にとって大切な人々や場所、大きな影響を与えた経験などを書くことでしょう。自分が何をどれだけしたかについては、

ほとんど言及しないと思います。

彼は必ず、伝道中に大きな影響を受けた経験を思い起こすことでしょう。プレストンに着いた時、若いヒンクレー長老は体が弱く、激しい迫害に遭いました。そこで父親に手紙を書き、伝道は時間とお金の浪費であると述べました。折り返し、短い手紙が来ました。「愛するゴードン、手紙を受け取った。提案したいことがひとつある。自分のことは忘れて、み業に励みなさい。」ヒンクレー副管長はこのように述べています。「父の手紙を手にして、私は……ひざまずき、主に誓いました。自分のことは忘れ、主のみ業に献身します、と。」

「1933年7月のその日は、私が決意を固めた日です。私の人生に新しい光がさし込み、私の心に新しい喜びが宿りました。イギリスの霧が晴れたようでした。」

少年のころ、ゴードンは家族とともに、ヒンクレー家の果樹園で夏を過ごしました。夜、田舎の真っ暗な闇の中で、お兄さんと一緒によく外で寝ることがありましたが、そんなときにはまず最初に大きくま座を、次に北極星を見つけました。そのうちに、ゴードンは船乗りたちが何世紀も前から知っていたこと、すなわち、地球が自転しているにもかかわらず、北極星の位置は常に変わらないことを学びました。そし





てこの独特な星は、彼にとって特別深い意味を持つようになったのです。「北極星は、すべてが変化する中でも不変であり、絶えず動き続けてとどまることを知らない空にあって、常に頼りにできる錨いかりのような存在なのです。」<sup>2</sup>

そのような事柄にゴードン・B・ヒンクレーが興味を引かれ、若いうちに主のみ業に専心することを学んだのは非常に重要なことでした。また、イギリスの旧友との再会に深い感動を覚えたことから、私たちは彼の一面を知ることができます。このような特質、つまり洞察力、献身、他人への思いやりこそ、彼の真実の姿なのです。

ゴードン・B・ヒンクレー副管長は、重い責任を担い、りっぱな成果を取める優れた指導者として広く知られています。けれども、それはほんの一面にすぎず、別の面では、涙もろく、楽しいことがあるとすぐ笑い、人生をこよなく愛する人です。また、大きな夢を持って一生懸命働く人には機会が無限にあると信じ、ユーモアのセンスで周囲の人々を楽しませ、黒雲が立ち込めるさなかにあっても楽観主義に徹する人なのです。「万事うまくいきますよ」というのが彼の口癖です。

ヒンクレー副管長を知る人は、よく彼の新しい一面に気づいて驚きます。無限の才能や能力を備えているように思えるのです。その知識の深さと幅、また経験の豊かさにも感銘を受けます。

にもかかわらず、彼は自分のことを、とてつもなく大きな責任を受けながら決してそれをじゅうぶんに果たしたことのない、内気でそばかすだらけの少年であると述べてきました。

総大会での最初の説教では、謙遜な心を魅力的な言葉で伝え、即座に聴衆の心をつかみました。「宣教師時代、ヨーロッパ伝道本部への転任を知らせる手紙を受け取った時に、最初の同僚から言われたことを思い出します。手紙を読んで同僚に渡すと、彼は手紙に目を通すなりこう言いました。『きつと君は、前世でおばあさんが通りを渡るのを助けてあげたんだよ。現世での君の行ないのおかげのはずはないからね。』」<sup>3</sup> 40年近くも教会の指導者として広く知れ渡ってきたにもかかわらず、ヒンクレー副管長は自分のことを、特別な機会を与えられた普通の人だと考えています。大管長会で13年間務めた後も、自分のことをただのヒンクレー兄弟と呼んでいるのです。

しかも、ヒンクレー副管長自身、「最も説得力のある福音の伝道は、忠実な末日聖徒の模範的な生活です」<sup>4</sup>と述べています。もちろん彼は自分のことを頭に描いていたのではありませんが、彼の生活は語る価値のある魅力に満ちています。

ゴードン・ビトナー・ヒンクレーは、1910年6月23日、プライアント・S・ヒンクレー、エイダ・ビトナー・ヒンクレー夫妻の間に生まれました。1930

年代初頭の大恐慌時代に、ユタ大学を卒業し、コロンビア大学でジャーナリズムを勉強しようと計画していた矢先、突然伝道の召しを受け、すぐにイギリスへ赴きました。帰国する前に、当時の伝道部長であった十二使徒評議員会会員のジョセフ・F・メリル長老から、帰還後、伝道上の課題に関してヒーバー・J・グラント大管長に直接報告するよう依頼されました。間もなく教会の「ラジオ広告および伝道文献委員会」の責任者兼書記として働くようになりました。これが教会の広報活動の始まりでした。20年間、教会においてメディアをいかに利用していくかという課題に取り組み、多くの福音伝道用小冊子を著わしました。

1937年4月29日、ゴードンは何年も前から面識のあった快活な女性、マージョリー・ペイと結婚しました。やがて、キャサリン（・バーズ）、リチャード・ゴードン、バージニア（・ピアス）、クラーク・プライアント、ジェーン（・ダドリー）の5人の子供が生まれました。

ヒンクレー副管長はステーク部長を務めていましたが、1958年4月6日、十二使徒補助に召されました。そして、1961年10月5日、十二使徒に召されました。さらに、1981年7月23日から1985年11月10日まで、スペンサー・W・キンボール大管長の副管長、1994年5月30日までエズラ・タフト・ベンソン大管長の副管長を務め、現在はハ





左——ヒンクレー副管長は福音に関する多くの小冊子を著わした。その中の1冊、「回復された真理」をジョセフ・フィールディング・スミス大管長に見せるヒンクレー副管長。

右——1975年、十二使徒定員会でともに奉仕したハワード・W・ハンター長老（左）とトーマス・S・モンソン長老。定員会の先任順に座っているこの写真は、今日大管長会でともに奉仕することを予告している。

ワード・W・ハンター大管長の第一副管長を務めています。ハンター大管長に次ぐ先任使徒として、十二使徒定員会会長でもあります。8人の大管長とともに働いてきたヒンクレー副管長は、現在教会幹部の中で最も長く幹部の責任を果たしてきたこととなります。十二使徒に召された時、教会員の数は180万人、ステーク部の数は345でしたが、現在は900万人近い会員と、約2,000のステーク部を擁するまでになっています。

ヒンクレー副管長とともに働く人は、彼を洞察力のある人と見なしています。教会のプログラムを簡素化することや会員の信仰を深めることといった問題について、彼は深く思い巡らしています。実際、彼はほかの人が主のみ業を理解するのを助けるために人生の大半を過ごしてきました。「広い見地に立

ちながら、小さな問題に取り組みなさい」と彼は勧告していますが、この始めには、大きな視野を持って自身の管理の職を果たすという彼らしい取り組み方がよく表われています。彼はいつものようにはっきりとこう述べています。「自分のワード部の狭い境界を超えて、神のみ業という広い視野に立つようにお勧めします。私たちには取り組むべき課題、人の理解力を超えてなすべき業があります。……地上でこの教会の会員ほど、天の神から大きな責任を託されている民はほかにないのです。」<sup>5</sup>彼の説教の中にはこのテーマが何度も繰り返されています。

広い視野に立つというヒンクレー副管長の特徴は、生活のあらゆる面に表われています。結婚して間もなく、彼は小さな家を建てるという大変な仕事に取りかかりました。家族が大きくなるにつれて増築できるように設計したのです。息子のクラークはこのように述べています。「父はいつも将来のことを考えて計画を立てました。彼の建てた家には、壁にドアを作る余地が残されていました。家を改築したり増築したりする際にドアが必要になることを予想して計画を立てたのです。」長男のリチャードもこう言い添えています。「私たちの家は家族の成長よりいつも1、2年遅れていたようです。それで家や庭に未完成な部分があるので、母はいつも苦労していました。だいたい後になってふたりがマンションに引

越した時、母はこう言いました。「これでやっと、お父さんが壊したりいじったりできないレンガの壁の家に住めるわ。」

目の前の事柄を超えて先を見る力は、家族の中でも発揮されました。ヒンクレー副管長は常に子供たちが教育を受け、神殿結婚し、世の中に出て人々に会うことを望みました。今日でも娘のキャサリンはこう言っています。「うちの家族は皆、旅行したり人々に会うのが好きです。そういう血統なのです。私たちは父から、何事も取り組むことができないほど大きな問題はなく、遠すぎて行けない距離はないということを感じ取りました。」バージニアはこう付け加えています。「どんなチャレンジでも乗り越えることができるという自信を父は持っていました。」

ヒンクレー副管長自身、困難な仕事におじけたことはありません。結婚後しばらくして、一家はヒンクレー家の農場にある家へ移りました。それは夏に使用する家なので暖炉はありませんでした。キャサリンはこう語っています。「父はほかの問題を解決するときと同じように、この問題にも正面から取り組みました。暖炉を注文し、取り付けの説明書を読み始めました。こうして無事に暖炉が取り付けられたのです。父は私たちにこのような方法でチャレンジに取り組むよう望みました。自分のしたいことを決め、注意深く指

示に従い、そして実行するのです。」

リチャードはこう述べています。「父は何でも直せました。洗濯機であろうと、芝刈り機や車であろうとです。そんなふうな器用で、並外れた実用性と良識を備えた父は、人生で豊かな収穫を刈り取りました。長い年月の間には想像力に欠ける人には不可能に思われるようなチャレンジもたくさんあったと思います。でも父は独自の解決策を考え出したのです。」

彼とともに働く人々によれば、ヒンクレー副管長はまったくまれに見る直観の持ち主であり、宗教的、社会的、政治的な要素が絡み合った複雑な問題を解決する方法に関する第六感が働くとのこと。教会の諸事を指導するうえでも、鋭い洞察力を発揮しています。

教会の批評家から個人的な攻撃を受けることもあります。それぞれの状況にあって穏やかに威厳を持って対処してきました。そのほかの課題に対しても、従順な態度と力強さをみごとに調和させてきました。

ヒンクレー副管長は、大管長会と十二使徒定員会が教会を治めるのに必要な鍵を握っており、主が予言者の召しの正しい継承制度を管理しておいでになることを、教会員に繰り返し強調してきました。

「主の聖なるみ名をいただくこの教会の頭かしらはイエス・キリストであることを、すべての人に理解していただき

いと思います。主はこの教会を見守〔つ〕ておられます。……主は、ご自身の方法によって人々を高貴で神聖な職に召し、またみこころのままに、主の家に呼び戻すことにより、その職から解任する特権と力、選択権を持っておられます。……現在私たちが置かれた状況について、私は何も心配していません。私はこのような状況を主のみこころとして受け入れています。……

皆さん一人一人に、また全世界の人に知っていただきたいと思います。ここには、地上に神の王国を築くという大きな目的へ向かって完全にひとつとなった忠誠心があり、それに基づく一致と兄弟愛があるのです。」<sup>6</sup>

どのようなテーマであろうと、ヒンクレー副管長ははっきりと、しかし憐れみをもって語ります。道に迷い苦しむ人々のことを考えたり、過去現在を問わず忠実な聖徒たちの話をしたりするときには、すぐに涙を流します。過去は現在のための手本であるという信念に基づいた彼の説教や書物には、教会歴史上の出来事や、現在の神権時代の人々や出来事に関する広い知識が満ちています。彼はこのように述べています。「私たちが今享受している楽しく平安な生活、そして最も大切なものですが、私たちの神に対する信仰と知識は、先人たちの多大の犠牲によってあがな贖われたものなのです。」<sup>7</sup>

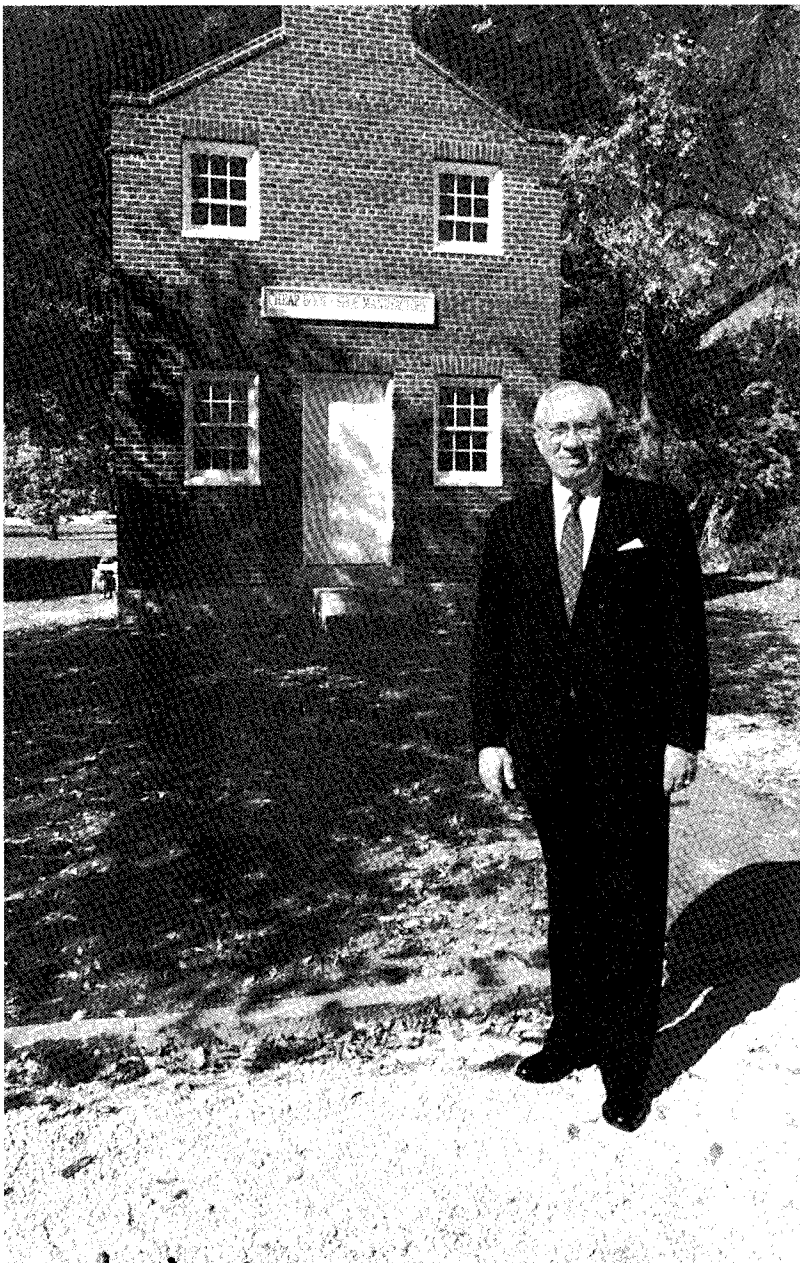
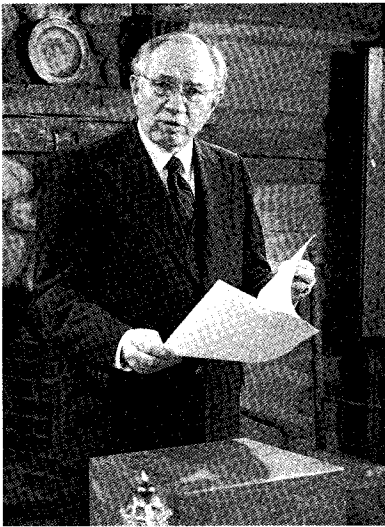
ヒンクレー副管長にも、開拓者の先祖が多くいます。1867年、ブリガム・

ヤングは彼の祖父アイラ・ナタニエル・ヒンクレーに、悪天候やインディアンから旅人を守るために、コーブ・クリークにとりでを築く責任を与えました。(今年の5月、ヒンクレー副管長は復元されたこのとりでを奉獻しました) ヒンクレー姉妹の父方の祖母メアリー・ゴープルはまだ13歳の時にイギリスからユタへ移住しました。メアリーの母、そして弟と妹も荒野を渡る旅の途中で亡くなりました。彼女も凍傷で足の指を失いました。ヒンクレー副管長はメアリー・ゴープルの困難な旅を信仰の模範としてたびたび引用しています。娘にあてた手紙の中で、ヒンクレー姉妹はこのように記しています。「私は今、バレー・ミュージック・ホールに座っています。お父さんが手車隊を記念する地区ファイヤサイドで話し手として招かれているのです。すぐにメアリー・ゴープルの話が出ることでしょう。」

ヒンクレー副管長には気取りがありません。政府の高官といるときも教会員といるときも同じように気楽に、しかし相手への関心を持って接します。彼がスペインの王、ホワン・カロス1世とソフィア王女に会い、美しい革の装丁のモルモン経を贈った場に私も同席しましたが、彼は宣教師たちに話すときと同じように熱心にモルモン経について話していました。

ローマへ立ち寄った際、ヒンクレー副管長はパチカン図書館の館長、レオ





ヒンクレー副管長は、初期の聖徒たちの労苦に対する深い知識と感謝の念を持っている。左上——ニューヨーク州フェイヤットのピーター・ホイットマー家で行なわれた教会創立150年祭で話すヒンクレー副管長。下——イリノイ州ノーヴーで。開拓者の先祖たちのように、ヒンクレー副管長とマージョリー夫人（右上）は、福音の原則に従った生活を送ってきた。子供たちはこう語っている。「自由に生活し、成長し、それぞれ的人格を形成し、可能性を最大限に伸ばすことができました。基盤となるものがしっかりとしていたからです。」

ナルド・ポイル神父にモルモニズム百科事典を贈呈しました。ふたりは旧知の間柄のようにあいさつを交わしました。ポイル神父はヒンクレー副管長が持つ、老化防止のすべや書物に関する知識に感銘を受けました。別れ際に、館長は強いアイルランドなまりで言いました。「ヒンクレー副管長はまことに傑出した方です。」

スイス神殿の大がかりな改築を視察している時、ヒンクレー副管長は最初に神殿を奉献した1955年に会った教会員たちに再び会いたいと強く望みました。その時の友人たちはヒンクレー副管長が彼らを忘れていなかったことを知って大喜びでした。



総大会で聴衆の方を見るヒンクレー副管長。彼は、鋭い洞察力の持ち主であると同時に、互いを強め合うこと、疲れ切った者を慰めることに心を砕く人でもある。

疲れを知らずに働くヒンクレー副管長は長年、ごくわずかな趣味の時間を家の改築と庭の手入れに費やしました。仕事でストレスが多いときには、作業服を着て、せっせと家の改築作業にいそしむのが楽しみでした。感謝祭の日にも家を建てるための土台を掘りました。休日は働くための日であると考えていたのです。

ヒンクレー副管長は今でも少しも力を抜かずに働いています。神殿の献堂式では各セッションで話をしますが、同じ話を二度することはまれです。子供たちにあてた手紙の中で、ヒンクレー姉妹はこのように書いています。「同じことばかり書くようですが、これほど忙しいお父さんは見たことがありません。一度にあまりにも多くのことをしようとするので、……大変そうです。周りの多くの人たちが引退するころなのに、お父さんときたら、さらに多くのことに手を伸ばしているんです。2日前に流しの排水口が詰まっていたと言いましたが、まだその問題についてひと言も触れようとしな

です。」

どんなときでも、ヒンクレー副管長のユーモアのセンスは彼自身を励ましてきました。ユーモアはヒンクレー長老のトレードマークです。バージニアは、父親のジョークのほんとうのおもしろさは、彼がジョークを言うのを見ることにあると言っています。「父は話の落ちに近づくとつれて、話が続けられないほどおかしそうに笑うんです。」

ヒンクレー副管長のユーモアのセンスは、多くの場面を重苦しさから解放してくれます。たとえば、ある日、昼食後に開かれた予算委員会で議長を務めていた時、教会教育部の部長たちが翌年度の予算を提示し、その場が緊張した雰囲気になりました。もうひとりの幹部がヒンクレー副管長に向かって尋ねました。「どう思いますか。」手のひらにあごをのせてほかの人の意見を聞いていたヒンクレー副管長は答えました。「昼食にポークを食べるのはもうよそうと思います。」皆どっと笑い、その場の緊張が解けました。

建築プロジェクトを視察するとき、ヒンクレー副管長はしばしば「ヒンクレーの法則」に言及します。その法則とは、「実際は見積もりよりもお金と時間が余計にかかる」というものです。

ヒンクレー副管長は家族からすばらしい支持を受けています。彼の家族は皆自分のことをあまり重大に考えません。これは父母の影響で培われた特徴です。ふたりとも、何年もの間多くの

人から注目されてきたにもかかわらず、驚くほど飾りけがないのです。ヒンクレー姉妹は子供たちや孫たちから遠く離れているので、その溝を埋めようと世界各地から手紙を出します。バージニアはこう述べています。「父の責任がどのようなものであるかを理解できるようになったのは、母のおかげです。母が事細かに教えてくれるので、私たちもその経験を分かち合うことができたのです。ふたりがソウル神殿の献堂式に行った時もそうでした。献堂を終えて出て来たふたりを韓国の民族衣装をまとった美しい女性たちがホールに並んで迎えてくれたそうです。どんな光景だったか目に見えるようでした。ところが父はこう言ったのです。「民族衣装？ 何のことだい。」

確かに手紙は溝をいくらか埋めてくれましたが、ヒンクレー姉妹は家族とともにもっと多くのことを経験したいと強く願っていました。ヒンクレー副管長がふたりの結婚50周年記念をどのように祝いたいかと尋ねると、姉妹は即座に答えました。「香港の街を子供たちと一緒に歩きたいわ。」その願いは実現不可能に思いましたが、子供たちは香港へ行くための旅費を貯金しようとして決心しました。キャサリンはこのように語っています。「母が香港の街の様子を詳しく説明してくれていたのです、実際に香港の街へ足を一歩踏み入れてみると、故郷へやって来たかのように感じました。香港へ来てみてやっ



と、母と父のもうひとつの世界へ入ったようでした。」

バージニアはこう述べています。「私たちは母と父が信じていることに非常に強い確信を持っていたので、ほかの人々によい印象を与えようとか、実際以上に自分をよく見せようとして気を回す必要がありませんでした。そういうことは父の流儀にはかなっていませんでした。父は大して重要ではない事柄について、あまり深刻に考えることを嫌いました。重要な事柄について強い確信があったからです。」

その重要な事柄とは福音です。家庭の夕べや家族の祈りはヒンクレー家の習慣になっていましたが、子供たちの中で、福音について堅苦しい話を聞いたのを覚えている者はだれもいません。価値観や信念はほかの方法で伝えられたのです。ジェーンはこう言っています。「父は口でとやかかく言うことはありませんでしたが、父の考えはいつもよくわかりました。」

リチャードは青少年の時に父親から受けた影響について、このように語っています。「私の関心事について父とあまり話した覚えはありませんが、父が福音は真実であるを知っていることは、心の中でわかっていました。それが私にとってはとても大切なことでした。父は錨のようでした。父が自分の気持ちをはっきりと語ったからではなく、ただ父は知っているんだ、と感じたのです。父にとって神は実在し、個

人的なつながりのある存在でした。父の祈りから信仰の深さがわかりました。父は私たちのために、また踏みつけられ虐げられた人々や、孤独で恐れおののく人々のために祈りました。父はよく、『悔いなく生きられるようにお祈りします』と言いました。」

キャサリンはこう付け加えます。「堅固な家庭で成長できたおかげで、いつも大きな安らぎを感じていました。状況は変わっても、父の価値観や献身的な態度は決して変わらないことを私たちは知っていました。守られ愛されていることを感じる家庭環境の中で、私たちは自由に生活し、成長し、それぞれの人格を形成し、可能性を最大限に伸ばすことができました。基盤となるものがしっかりとしていたからです。」

同様に、ヒンクレー副管長は、求めに応じて確信に満ちた指導を与え、教会全体に安定した雰囲気をもたらせるよう尽力してきました。彼は強さとやさしさを兼ね備え、互いを強め合うことと、疲れ切った者を慰めることに心を砕いています。プリガム・ヤングは、冬の雪に覆われた荒れ野で危機に瀕している2団の手車隊について知ると、聖徒たちに「荒れ野にいる人々を助けに行く」ようにと嘆願しましたが、ヒンクレー副管長はこの話を繰り返し引用しています。

おそらく、ヒンクレー副管長がこの話に共鳴するのは、失意と絶望、罪の荒れ野をさまよい、弱っている人々を

助けるために、みずからの人生を捧げてきたからでしょう。「私たちの周囲には、助けの必要な人、助けるに値する人が数多くいます。主イエス・キリストに従う者としての私たちの生涯の使命は、人を救うことでなければなりません。……日々つらい生活をしているこれらの人々に対して、私たちはさらに助けの手を伸べることができます。」<sup>8</sup>

ヒンクレー副管長は61年前、父親の勧告を深く心に刻み、自分のことを忘れてみ業に励みました。その献身的な態度を固く守った彼は、あの北極星のように、彼の影響を受けるすべての人人にとって安定した土台となり錨となったのです。また、幸運にも彼を知る機会に恵まれた人々に、機知と温かさで見習う価値のある模範を通して祝福をもたらしました。かつてある賢人が言ったように、最も説得力のある福音の伝道は、末日聖徒のりっぱな生活そのものなのです。

それはまさに、ゴードン・B・ヒンクレー副管長の人生なのです。□

注

1. 「エンサイン」1987年7月号, p. 7
2. 「聖徒の道」1989年7月号, p. 68
3. 「インブループメント・エラ」1961年12月号, p. 987
4. 「エンサイン」1982年5月号, p. 45
5. 「エンサイン」1990年5月号, p. 97
6. 「聖徒の道」1994年7月号, p. 61
7. 「聖徒の道」1992年1月号, p. 63
8. 同上pp. 63-64





# トーマス・S・モンソン

## 第二副管長

十二使徒定員会会員  
ジェフリー・R・ホランド

### 走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおす

トーマス・S・モンソン副管長の執務室の机の上は、驚くほどきれいに整頓されています。(膨大な量の仕事を、ときには3人の秘書に同時に手伝ってもらいながら、毎日こなしていることを考えると、信じられないほどきれいです) この机のちょうど正面の壁には、救い主のみごとな絵が掛けられています。新たにハワード・W・ハンター大管長の副管長となったモンソン長老がその絵を見詰めていると、今にも主が語りかけてくださるような気がするのです。この絵はモンソン副管長のお気に入りです。22歳で監督を務めていた時に入手して以来、割り当てられたあらゆる任地に携えて行きました。

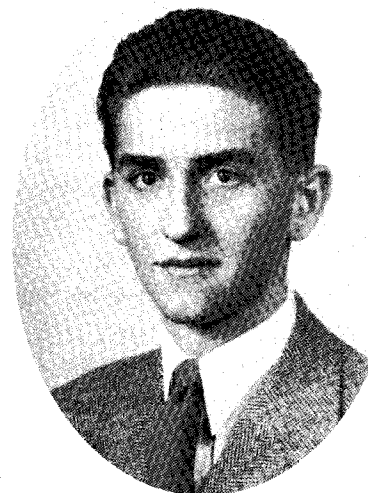
「私は、主に倣った生き方をしようと努めてきました。」モンソン副管長が、懐かしむようなまなざしで、救い主の絵を見ながら静かに語ります。「むずかしい決断に迫られたとき、あるいは山積する事務処理の仕事に囲まれながら祝福の依頼にこたえるかどうか思案しなければならないとき、私はあの絵をじっと見ながらこう自問します。『主ならどうされるだろうか。』そしてそのとおりに行なおうと努めるのです。」そしてあの独特のほほえみを浮かべながらこう付け加えました。「はっきりと申しあげておきますが、部屋に残って事務処理の方を選んだこ

とは一度もありませんでした。」

楽天的で活力に満ちた66歳のモンソン副管長と話していると、この人がもう使徒の召しを30年以上も果たしてきたとは、とても思えません。そのうち8年間はエズラ・タフト・ベンソン大管長の副管長を務めていました。確かにこの人物は、私生活でも、予言者、聖見者、啓示を受ける者としての召しにあっても、救い主を模範とし、生涯を主に捧げてきました。彼の好きな聖句のひとつにもあるように、モンソン副管長は常に「主の用向を有てる者」なのです。(教義と聖約64:29)

「兄について知りたければ」とモンソン副管長の弟、ロバートは言います。「父について知っていただくべきでしょうね。父は物静かな人でした——兄よりもですよ」と、ロバートは笑います。「しかし、どんな責任を受けてもりっぱにやり遂げる人でした。父にはこんな信念がありました。『どうせやるんなら、とことんやらなければいけない。』いつも完璧にやる人だったんです。」

確かにモンソン副管長は、地上の父親から受け継いだこの特質を、天父のみ業の中で力強く発揮しています。しかしそれも、教会の内外を問わず彼を知る人々がすぐに気づくように、多面的な特質と多くの才能を兼ね備えたモンソン副管長の一面にすぎません。



左——トーマス・S・モンソン副管長は、1985年11月10日以来、大管長会の一員として働いている。上——ユタ州ソルトレークシティの高校に通い、「トミー」の愛称で呼ばれていた青年時代。



「彼が負っている責任の重さは、普通の教会員にはとうてい理解できません。」29年以上にわたってモンソン副管長の秘書を務めている、リン・カーネゲーター姉妹の言葉です。「でも彼は、何をするにも笑みを絶やしません。骨の折れる仕事をやり遂げる驚くべき能力があり、複雑で細部にわたるたぐさんの仕事を同時に処理してしまう驚くべき能力も備えています。しかも仕事は徹底しています。どんな仕事でも、決して途中で投げ出したりしません。」

おそらく職務に対するこのようなモンソン副管長の献身的態度を知ったうえで、1972年4月の総大会のモンソン長老の説教を読めば、それはもっと意義深いものになるでしょう。「求む、仕上げ職人」と題した説教です。家具店のショーウィンドーにはられた簡単な求人広告の短い言葉を取り上げて、モンソン長老はこう語りました。「仕事でも人生でも、仕上げ職人と言うべき人たちは常に必要です。彼らの存在は地味ですが、働く場は多く、貢献は大きいのです。」

有史以来、人生行路を歩む人々は皆、基本的な疑問を抱いています。自分は……無事終えるのだろうか。〔そして、使徒パウロが語ったように賞を得られるのだろうか。〕……パウロは……こう言いました。……『あなたがたも、賞を得るように走りなさい。』（I コリント 9：24）」（「大会報告1970-72年」

p.312)

全力を尽くして献身する姿勢と、揺るぎない決意を秘めたモンソン副管長の非凡な特質は、次のような言い方ができるとすればですが、仕事の場だけではなく、私生活や家庭生活でも見受けることができます。「誠実」という言葉は、トム（青年時代は『トミー』とも呼ばれました）・モンソンをよく知る人々が彼について語るときに、しばしば用いる言葉です。彼の誠実さは心の底からのもので変わることがありません。それは、旧知の友に対してはもちろん、多忙を極める現在の生活の中で、忘れても無理もない知人に対してさえ同様です。彼はそのような人たちのことも、ちゃんと忘れずに覚えていきます。

彼の生涯にわたる友人ジョン・パート兄弟は、こう話しています。「トムが、自分のワード部内に住む、ご主人に先立たれた87人の姉妹に対して示す心配りには、彼の誠実さと人々に献身する態度がよく表われています。私たちの場合は、監督の責任を解任されると、いわば次の責任に移って、ご主人に先立たれた姉妹たちのことは後任者に引き継ぎました。しかし、トムは違いました。彼はどうか時間を割いて、彼女たちを訪問し続けたのです。彼は私の知っている人の中で最も誠実な人物です。彼が自分のふるさとを忘れることは絶対にありませんし、教会幹部に

左——教会幹部に召される前は、テゼレトニュースプレス社の総支配人を務めていた。350人いた社員の中の何人かとともに。右——1963年10月4日にトーマス・S・モンソン長老が十二使徒定員会会員に召されたころの家族写真。フランシス夫人と3人の子供たち、トーマス（12歳）、アン（9歳）、クラーク（4歳）とともに。

なる以前からの知人を決して忘れはしません。」

87人の姉妹たちのほとんどはもう亡くなりましたが、彼女たちの「監督」は最後まで訪問を続けました。何年前前のクリスマス休暇の晩、モンソン副管長は、いつものようにこの姉妹たちを訪問しながら、ポケットマネーで買ったクリスマスプレゼントを渡しました。その中には、何年も前からモンソン家の鶏小屋で育てた肉づきのいい鶏の料理もありました。また、彼が頻繁に足を運んだソルトレークシティの多くの療養所のひとつに、自分のワード部の姉妹が、ひとりひっそりと過ごしていることを、モンソン副管長は知りました。彼女は失明しかけていて、そのため薄暗い部屋はさらに暗く思われました。モンソン副管長がこのしとやかな姉妹のそばに歩み寄ると、彼女はぎこちなく手を伸ばし、そのク



クリスマスに訪ねてくれた、たったひとりの訪問者の手を探りました。「監督、あなたですか。」彼女は尋ねました。

「そうですよ、愛するハッチ姉妹。私です。」

「まあ、監督。」彼女の見えない目から涙がこぼれました。「あなたが来てくださるって、わかってましたよ。」

みんな、彼が来てくれるとわかっていましたし、事実、彼はいつも彼女たちを訪れたのです。

高齢者に対する尊敬の気持ちと、ほとんど神聖なまでの誠実な態度とあわせて、モンソン副管長はもうひとつの誠実さ、つまり聖霊の静かで細いささやきに従う誠実さを身につけています。それは、トーマス・S・モンソンの生涯を通じて、最も顕著な特質であるとともに、最も人々に影響を与えてきた特質かもしれません。「この世で得られる最もすばらしい思いは、自分の肩に主のみ手が置かれたときの気持ちです。」モンソン副管長は、穏やかに、感情を込めてこう語ります。「まだ少年のころに受けた祝福師の祝福の中で、私には、識別の賜<sup>たまもの</sup>が与えられると約束されました。その宣言が私の人生で豊かに成就したことを、感謝しています。」実際、モンソン副管長の生涯、特に使徒としてまた大管長会の一員として過ごした時期は、ある意味で、聖霊の導きを受けた人物の長編の一代記とも言えるのではないのでしょうか。そこには、みたまの勧めに従って起きた、感動的なさまざまな奇跡が記されてい

ます。

少し前、モンソン副管長の執務室の電話が鳴りました。死期が近づいた82歳の母親を持つ男性からでした。母親の最後の、そしてたったひとつの願いは、死ぬ前に「大好きな教会幹部」と会ってみたいというものでした。そのような電話がかかってくる時、秘書たちの願いは、なんとかモンソン副管長より早く電話を取ることです。そうしないと、モンソン副管長の毎日がこうした訪問に費やされてしまうからです。それほどこの種の依頼は後を絶たないのです。この日は、秘書のひとりがこの特別な電話を取り、事情をよく聞いた後、モンソン副管長に伝言を必ず伝えます、と約束しました。さらに、モンソン副管長のスケジュールはぎっしり詰まっていることを丁寧に説明し、彼が個人的に訪問できなかったとしても、モンソン副管長の祈りの中に必ずお母さんのことを入れてもらうようにします、と話しました。この信仰深い男性は、電話の返事にとっても感謝し、じゅうぶん満足して受話器を置きました。

はたして、このメッセージはモンソン副管長に伝えられました。いつものようにスケジュールはいっぱいで、訪問は無理なようでした。しかし、1日が過ぎるとモンソン副管長の心が落ち着かなくなりました。その晩はもっと気が気でなくなりました。翌日、副管長はもう自分の心に逆らえなくなりました。そして車に乗り込むと、まだ一度も会ったことのない死期の迫った婦

人の元へと、不慣れな道を急ぎました。

通りも、舗道も、町並みも、何もかも見慣れない場所を探しながら、モンソン副管長は、ようやく目指す家にたどり着きました。ドアをノックし、驚いている息子さんに自己紹介すると、訪問する前に買った観葉植物の鉢を手渡しました。そして、質素な寝室に通されました。そこには、モンソン副管長の新たな友人が、昏睡<sup>こんすい</sup>状態で生と死のはざまをさまよっていました。

モンソン副管長はベッドの傍らにそっと座ると、彼女の手を握りました。そして、やさしく愛情のこもった口調で、さまざまな福音の原則をたっぷり時間をかけて話しました。彼女は目が見えず、しゃべることさえできませんでしたが、息子さんはこの偉大な使徒の身振りを少しも逃さずに見詰めていました。そして、「母はきょう、どなたが訪ねてくださったかだけでなく、副管長が話されたすべての言葉<sup>あかし</sup>を理解していました」と証しました。やがて祝福を施すと、モンソン副管長はつましい暖炉の上の額に収められた自分の写真に気づきながらも、そのことには触れずに部屋を辞したのでした。

この愛すべき姉妹は、この世で最後の望みをかなえられ、9時間後に息を引き取りました。翌日、地元の新報の死亡記事欄に次のような文が掲載されました。「アリス・ピーターソン・ティンギー。老衰のため自宅で死去。82歳。愛にあふれた女性で、多くの人々の生活に恵みをもたらした。私たちは、トーマス・S・モンソン副管長

が彼女とその家族に与えた影響と特別な祝福に対し、感謝するものである。」

このように、ほんの一瞬の重要な機会をとらえて霊的な促しに従うという態度は、トーマス・S・モンソン長老の生涯とその働きを語るうえで、著しい特徴のひとつなのです。

高齢者に対するモンソン副管長の誠実な態度についてはそのようなさまざまな証<sup>あかし</sup>がありますが、これに加え、教会の若人に向けられた同じように強い関心についても、数々の感謝の言葉が寄せられていて、興味深いのではないのでしょうか。モンソン副管長にはどこかいつまでも若々しいところがあって、そのおかげで彼は教会の全会員、とりわけ若い会員たちと容易に親しく交わることができます。彼は若人を愛し、心にかけて、霊的な面で彼らが成功できるよう献身しているのです。

第二次世界大戦の終結に伴い海軍を除隊した若きトム・モンソンは、すぐにワード部書記に召されました。ある晩、彼は黙って記録を取っていましたが、監督会はMIAプログラムが抱える課題をはじめ、ワード部の若人のプログラムが明らかに成功を収めていない現状について憂慮していました。書記を務めるこの若者は、ずっと我慢してきましたが、とうとうこう言いました。「兄弟の皆さん。失礼かと思いますが、このワード部のMIAと青少年が直面している課題について、私にもひと言、言わせていただけないのでしょうか。」そして、ワード部の青少年プログラムのよくない点を指摘するだけでなく、

どこが素早く改善できるか、深く掘り下げた考えを、矢継ぎ早に、要約し始めました。やがて自分が出過ぎたと感じ、こう言いました。「赦してください。言い過ぎたみたいです。」そして中座したのでした。

彼が飛び出して行くとすぐに、監督会はお互いの顔を見合わせて言いました。「何を待っているんだ。」監督会はずぐに彼を部屋に呼び戻し、ワード部書記を解任して、MIAの管理会長に召しました。半年後、第67ワード部の青少年の合同プログラムは、心から献身する若い管理会長の下で、テンプルビュースターキ部のほかの指導者たちが参考にするほどの、模範的な青少年活動になりました。

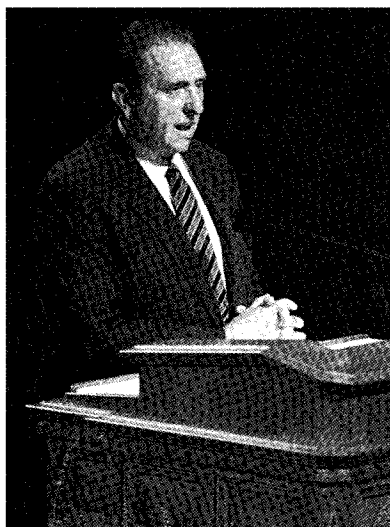
若人に対するこうした生涯をかけた献身は、25年間にわたって務めている現在のボーイスカウトアメリカ連盟全国理事会の仕事に反映しています。モンソン長老の任期は、著名な同組織の役員の中で最長の期間になっています。ボーイスカウトアメリカ連盟の事務総長であるジェリー・B・ラトクリフ氏はこう語ります。「私は、トム・モンソン以上に、そのよい点を挙げられる人を知りません。私にとってトムは、文字どおり『熱意』の塊のような人です。彼の中に神が宿っているか、ほんとうに『啓示』を受けているのではと感じるほどです。どの集会に出ても、その集会を明るくするんです。末日聖徒イエス・キリスト教会は、青少年のために彼のような指導者を持って、祝福されています。」

ある同僚は、モンソン副管長が青少年とよい関係を保てるのは、「彼自身が、いまだに少年のような心を持っているからです」と語っています。「ユタジャズのバスケットの試合など、大学対抗試合で彼を見かけたことはないでしょうか。彼は自分自身、強い関心を持って会場に足を運びます。トムは大きな責任を担った、重要な人物ですが、今でも青年のような熱意を見せます。」

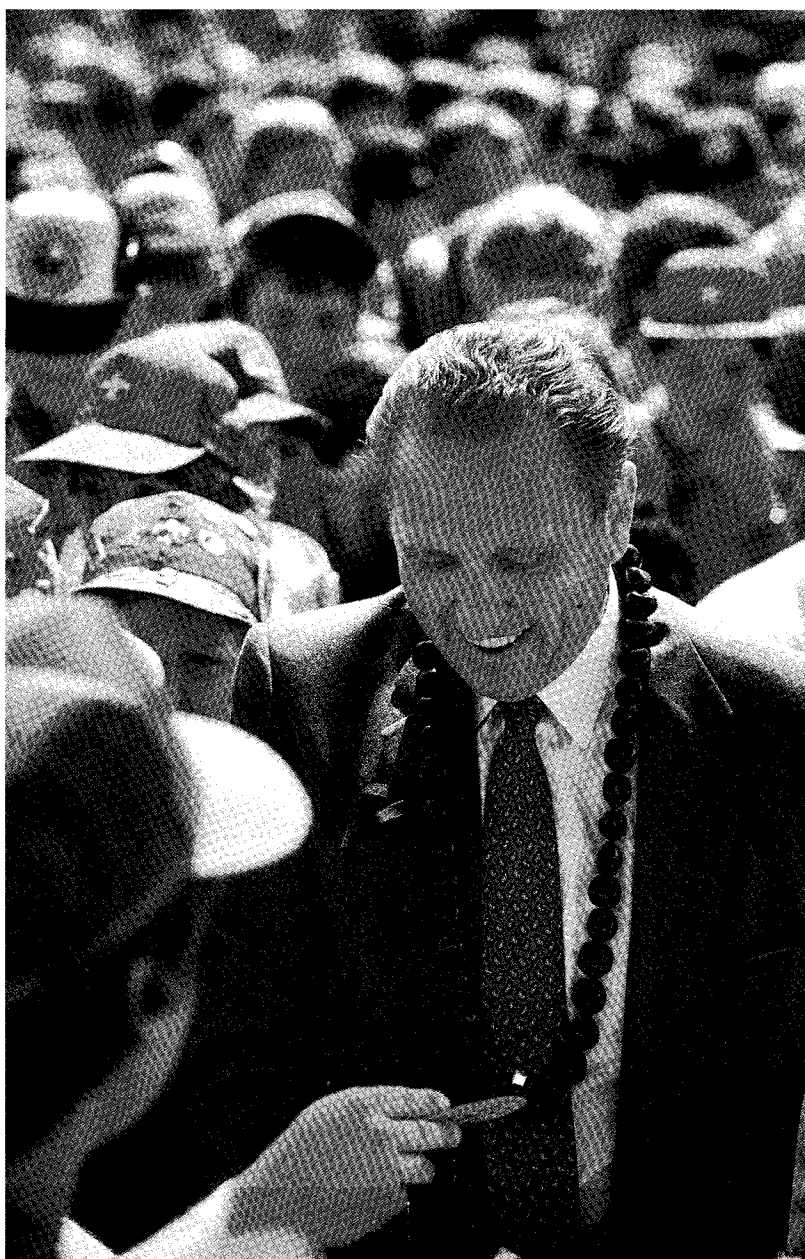
モンソン長老は12歳のころ、有名なテンプルスクウェアにあるかもめの記念碑を初めて訪れました。この時彼は、自分より多少思慮深いはずの大人が記念碑の周りの池に投げた硬貨を、どうすれば取り出せるだろうかとずっと考え込んでいたそうです。この逸話を知れば、前述の同僚の人物評にもうなずけます。とはいえ、トミー・モンソンはテンプルスクウェアの訪問に大変感動し、ワード部に戻ってから、かもめとクリケットのすばらしい開拓者の物語について、生涯で最初の話をしました。

モンソン副管長に、当時のようないたずら好きの少年の面影はもうありませんが、先祖から受け継いだものへの思い入れは昔と変わっていません。指導者として地元で、全国で、そして国際社会で市民活動に携わり、常に顕著で意義深い貢献をしています。その惜しみない態度と友情、楽天的な性質は、地域社会や政府関連のさまざまな活動で、また数多くの会社や専門団体における仕事で、モンソン長老の大きな力





PORTRAIT BY OLAN MILLS



左上——モンソン副管長は力強い話し手として、信仰を鼓舞する経験を紹介することでよく知られている。右上——モンソン長老は1948年10月7日、フランシス・ジョンソン・モンソン姉妹と結婚した。彼女は、教会、家族、友人への献身と、偽りのない忠誠という点で、モンソン副管長と肩を並べる女性である。下——モンソン副管長は、ボーイスカウトアメリカ連盟の全国理事会で、25年にわたって奉仕してきた。同理事会で最も長い役員である。

になっています。

デゼルトニュース出版社で45年来の同僚であるグレン・スナー氏（モンソン副管長は現在、同社の取締役会長であり、スナー氏は取締役を務めている）は、こう語ります。「私が最初にトムに会った時、彼は会社の広告部門にいて、私は編集部門にいました。彼はエネルギーで、有能であり、熱意にあふれ、<sup>めいぜき</sup>明断な判断力とすばらしい記憶力を持っていました。中でも特に、思慮深く、思いやりがありました。トムはいつも相手のことに配慮しますが、今でもそれは変わっていません。」

一緒に地域活動に携わる若い同僚は、モンソン副管長のキリスト教徒としての特質について触れ、こう語っています。「自分から物事を進める人々は、人の気持ちを考えずに仕事をします。特に、相手が自分より下の立場にある人であればなおさらです。ところが、モ



**モンソン副管長の人々への純粋な愛と関心は、その笑顔や自然に生じる笑みによく表われている。**

モンソン副管長は確かに自分から物事を進める人ですが、決してそのような相手を無視した方法は採りません。彼はいつも私の立場を深く考え、親切にしてくれます。」

ロバート・H・ビシャーフ兄弟は、ソルトレークシティ近郊ならびにユタ州の数々の市民活動で、モンソン副管長の長年の同僚であり、友人ですが、彼は最近こう語りました。「50年にわたる職歴の中で、いちばん忘れられない人物はトーマス・S・モンソン副管長ですよ。四半世紀の間、数多くのさまざまな機会に数え切れないほど彼と会いました。何か所かの重役会議で顔を合わせ、ほかにも各種の委員会、結婚式、葬儀、スポーツ行事、市民活動で会い、個人的にディナーに誘い合ったり、単に友人として訪問したりすることもありました。どの場合でも、居合わせた人々は皆、モンソン副管長の温かい人柄を感じます。彼はどのような環境の中にあっても、自然で親しみを感じさせる天性たまたものの賜を持っているので、一緒にいる人たちは安心するんです。彼の鋭敏な心、誤りのない判断、鮮明な記憶力を頼って、人々はいろい

ろな問題についてモンソン副管長の意見を求めます。彼の評判は教会を超えてはるかに広がり、全国的にも国際的にも、彼と面識のあるすべての人から高い尊敬を受けています。」

教会、家族、友人への献身と、偽りのない忠誠という点で、モンソン副管長に自分なりの方法で肩を並べることができるのは、副管長の最愛の人、フランシス・ジョンソン・モンソン夫人です。モンソン姉妹は物静かで、控えめな人ですが、彼女がいなかったなら、今日教会員が知り、称賛するトーマス・S・モンソン長老もなかったでしょう。モンソン姉妹は結婚当初、つまり夫がワード部書記の責任を受けた時から、大管長会で召しを果たす現在に至るまで、45年間、モンソン副管長の教会での召しのために集会で夫の隣の席に座ったことは、ほとんどありません。「それでも妻はこれまで不平を言ったためしがありません。」モンソン副管長は確信を持って言います。「一度もないですね。これまでの結婚生活を通じて、彼女は、私の教会での奉仕の妨げとなるようなことは何ひとつしませんでした。フランシスからは、ただ支持と励ましだけを受けてきました。」

モンソン夫妻の娘、アン・モンソン・ディブ姉妹は、母親について最近こう語ってくれました。「私たちが成長するにつれ、父は十二使徒評議員会

会員の務めのために家を空けることが多くなりました。世界じゅうの伝道部を訪問するための出張も多く、一度行くと5、6週間は帰ってきません。そんなとき、母は私たちにこう言ったものです。「お父さんは教会の責任を果たしているのよ。お父さんがいないときはいつだって、私たちは見守られているはずよ。」母はこの教えを、言葉だけでなく、必要なことはすべて必ず行なわれるようにするという、彼女の静かな方法によって、私たちにわからせてくれたのです。

母は、現代の多くの女性とは違っていました。社会で認められることを求めるのではなく、息子のうれしそうな笑顔や、孫の差し出すかわいい手などに、自分の評価を見いだそうとするような人でした。ウィルフォード・ウッドラフ大管長は、かつてこう言いました。「母親は、ほかのいかなる人よりも、子孫に大きな影響を与えます。その影響力はこの世から永遠にわたって続くのです。」私は母自身と母の影響力に感謝しています。そして彼女が私に注いでくれた愛に、常にふさわしくありたいと願っています。主の使徒の娘として受けたたくさんの祝福を思い返すと、私にとっていちばん大きな祝福は、父が結婚した女性つまり今の母親の元に生まれたことではないかと思えます。」

何年前か前、北ヨーロッパでの責任を



果たしていた時、モンソン副管長は、体に障害を持つジョン・ヘランダー兄弟という26歳の青年を知りました。ジョンはスウェーデンのクングスバックで開かれたユースカンファレンスに出席し、1,500メートル走に参加しようと決意しました。入賞する見込みなどなく、完走できる可能性さえありませんでした。しかし彼はスタートラインに並び、走り始めたのです。

スタートを告げるピストルが鳴った時点から、ジョンの苦しむ様子はだれの目にも明らかでした。ほかの走者は彼を置いてスタートしたのに、ジョンはスタートラインに立ちすくんでいるかのようです。ほかの走者全員が2周目を終えようとしている時、ジョンはまだ1周目の途中でした。こんな調子でレースは進み、入賞者が発表される段になっても、ジョンはまだ全行程の半分にかろうじて到達したところでした。

モンソン副管長はこう語っています。「おそらくこのレースが終われば、ジョンはそっとトラックから退いていなくなるだろうと、だれもが考えていたでしょう。しかし、明らかにジョン・ヘランダーは、そう考えてはいなかったのです。」彼は黙々と走り続けました。走る速度は非常にゆっくりですが、疲労は極限に達しています。しかし彼の心からの決意は観客の皮肉にも揺るぎません。観客席が静まりました。ほんとうのレースが、まだ続いていたのです。

ジョン・ヘランダーが1,500メー

トルを完走するまでには、ほかの競技者がゴールに入ってからかなりの時間が過ぎていたように思われましたが、競技場全体が歓声とどよめきに包まれていました。こうしてつまずき、よろめき、疲れ切ってはいましたが、勝利を勝ち取ったジョン・ヘランダー兄弟は、真の勝者のために再び張られたテープを切りました。決意、勇気、献身、信仰（何と表現してもよいのですが）、その日を制したのです。

この話はモンソン副管長が好きな話のひとつです。おそらくこの話は、どんな仕事もかかり始めたら最後までやり抜いた父親のことを、思い出させるのでしょうか。あるいは母親を思い出させるのかもかもしれません。みすばらしい姿をした人々がおなかをすかせて訪ねて来ると、彼女は自分の持ち物を惜しみなく人々に分け与えていました。生涯を通じてそうでした。子供は親に似るものです。モンソン副管長は、人々が物心両面で豊かになれるように、助けることに生涯を捧げてきました。これまでモンソン副管長と接した、ジョン・ヘランダー兄弟のような人々は皆、彼から励ましを受けてきました。モンソン副管長は、彼らが第一歩を踏み出した時の気持ちを理解しています。彼らが生活の中でどのような不自由を感じるかよく知っています。だからこそモンソン副管長はなおさら、みずからの愛と忠実さと確固とした意志力をもって、彼らのために奮闘してきたのです。もし今、ジョン・ヘランダー兄弟が長距離競走に出たら、トーマス・

S・モンソン長老は、トラックのカーブまで降りて行き、必要ならトラックの外側から伴走し、大声で励まし、重い手を上げてやり、弱ったひざを伸ばしてあげるでしょう。そして、ジョンや彼のような人たちが完走できないことがはっきりすると、ただちにトーマス・S・モンソン長老はその大柄な体で彼らを背負い、栄光のゴールまで彼らを運んでいくでしょう。彼らは間違いなく成功します。負ける心配はありません。テープを目指して走るトーマス・S・モンソン長老は、必ずキリストにおける勝利を手にするでしょう。

教会の新しい大管長会の一員として私たちが支持するこの人物は、まさに仕上げ職人であり、勝利者であり、彼と知り合うすべての人々の友人です。十二使徒定員会の故ブルース・R・マッコンキー長老は、かつて彼を「教会政体の中の天才」と呼びました。しかし同時に、彼のいちばん優れた才能は、その娘さんが言うように、「孫たちのためにすばらしい思い出を残してあげること」なのかもしれません。また、何でもやりだしたら、とことんやり遂げる人でもあります。

いつしか世の救い主のみ前に立って、大好きな絵の中に見てきた主のまなざしに出会う時、トーマス・S・モンソン副管長はこう言うことができるでしょう。「『わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおしました。』(IIテモテ4：7) □

# 10代の生徒に教える

デブラ・レイシー



ILLUSTRATED BY DAVE McDONALD

**教**会で何年かにわたり教師の責任を果たす中で、私は10代の生徒を教える際の効果的な方法を学んできました。

最も重要なことは、みたまを求めることです。10代の生徒たちは単に福音の基本原則についてだけでなく、回復された教えが自分たちにどのように当てはまるのかについても理解を深める助けを必要としているのです。そのような助けを与えてくれるのは、みたまです。みたまがその場にあると、教室の生徒たちの間に、穏やかでしかも動機づけを与えるような雰囲気が生まれるのです。

10代の生徒たちは、自分を心にかけてほしいと思っていることも学びました。そのため私は、彼らの目を見ながら、名前と呼ぶことで関心を示しています。また、レッスンの目的と重要性について説明すると、生徒たちは一層注意を払い、よく考えながらレッスンを聞いてくれることも知りました。

レッスンの進行を妨げる生徒に対しても、目と目を合

わせることにより、事前に問題を防ぐことができます。また、教室の中を回って歩くのも好きです。青少年は概して教師が近くにいると行儀がよくなるものです。にぎやかな生徒の肩に手を置くことも、学習の雰囲気を保つうえで役立つでしょう。若い人たちは、敬意と信頼を示されると、同じ気持ちでこたえてくれるものです。

レッスンでは、読んだり、話し合ったり、ロールプレイングをさせたりなど、生徒たちに次々と指示を与えるようにしています。多様性を持たせることで、学ぶ方も教える方もいきいきとするからです。

レッスンが終わるたびに、いつも自己評価をしています。改善すべき点をはっきりさせるとともに、よかった点を書き留めておくのです。こうして過去の経験に新たな経験を積み重ねることにより、福音について話すときにどうしたら活気のある雰囲気を作り出せるかを学び続けています。□



## 霊的な成長——生涯にわたる務め

**ガ**リヤ湖の岸の近くで、救い主は5つのパンと2匹の小さな魚をもって、おおぜいの群衆に食をお与えになりました。この奇跡を目にした一部の人は、翌日、カペナウムまで救い主を尋ねて行きます。救い主はそれを見て、彼らが尋ねて来たのは、愛をもって行なった奇跡が霊の必要を満たしたからでなく、パンを食べて肉体的な飢えを満たしたからである、と言われ、こう勧告されました。「朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい。」(ヨハネ6:27)

私たちは多くの時間と精力とを仕事に費やして、食物をはじめ、物質的な生活を支えるために必要な、さまざまなものを得ています。イエスの言葉は、霊的な生活を維持するためにも努力が必要であることを、私たちに思い起こさせてくれます。それには、計画を立て、実践し、根気よく続けなければなりません。だれにとっても、それは生涯にわたる務めなのです。

### 自分の生活に合った計画を立てる

どんなにすばらしい業績も、たいていは計画から始まります。だれでも個人的な努力と祈りを通して、霊的成長に必要な、自分の状況に合った方法を見いだすことができます。

カリフォルニア州サクラメントに住むシャーリーン・アランド姉妹は、教会の責任と忙しい仕事、それに慢性的な病気に苦しむ姉の介護のために、自分の時間をやり繰りしています。「教会の機関誌を読んだり、自分のしたいことをしたりする時間なんて、取れな



ILLUSTRATED BY LORI WING

いと思っていました」と彼女は述懐します。ところが、彼女が所属するステーキ部のステーキ部長はすべての会員に、毎週月曜日に家庭の夕べを開くようにチャレンジしました。「私はひとり暮らしですが、家族がいたとしたら持てるような霊的成長の機会が、私にも必要だと感じたんです。」以来、アランド姉妹は、毎週月曜の夜、少なくとも1時間は自分の霊的成長のために使うようにしてきました。「私にとっては神聖なひとときです。教会の機関誌や出版物を読むこともあれば、食糧貯蔵に取り組んだり教会のビデオを見たりすることもあります。こうして、私はずっと求めていた自分の時間を手に入れることができました。」

●霊的な成長のために定期的に時間を取るには、何ができますか。

### 実践し、根気よく続ける

霊的成長のための努力は、絶えず行なっていくものです。祈ったり聖典を読んだりしていると霊的な経験をする

ことがよくありますが、霊的な成長を続けるには、心からの願いと絶えざる努力が必要なのです。

霊性に新たな活力を与える方法のひとつは、自分を忘れて人に奉仕することです。同時に、その愛を受ける人も霊的に満たされるでしょう。ユタ州バウンテフルに住むある若い母親は、人生のつらい時期に、自分のワード部のある特別な姉妹が示してくれた、霊性に基づくこまやかな思いやりがどんなに助けになったかを、次のように語っています。「双子の娘が生まれた時、ちゃんと育てていけるだろうかと不安でした。すでに幼い子供が3人いましたし、ひとは10歳になる心身障害児だったのです。夫は仕事で週の大半を留守にしていました。そんなとき、心やさしい友人たちが何日にもわたって昼も夜も手伝いに来てくれたのです。ところがある日、ひとりの誠実な姉妹が朝の6時半に私の家に来てくれました。数時間の訪問でしたが、彼女とふたりで赤ちゃんの世話をしたり、家の中を片付けたり、上の子供にその日の支度をさせたりするには、じゅうぶんな時間でした。4カ月間、彼女はそれを、毎日、続けてくれたのです。彼女がいなければ、とてもやっていけなかったと思います。」

スペンサー・W・キンボール大管長はこのように述べています。「女性が……愛に満ちた奉仕に打ち込んでいるときは必ず、神に似た者となるために学んでいるのです。」(「エンサイン」1976年3月号, p.5)

●霊的成長のための原則を生活の中で実践するには、どうしたらよいでしょうか。□







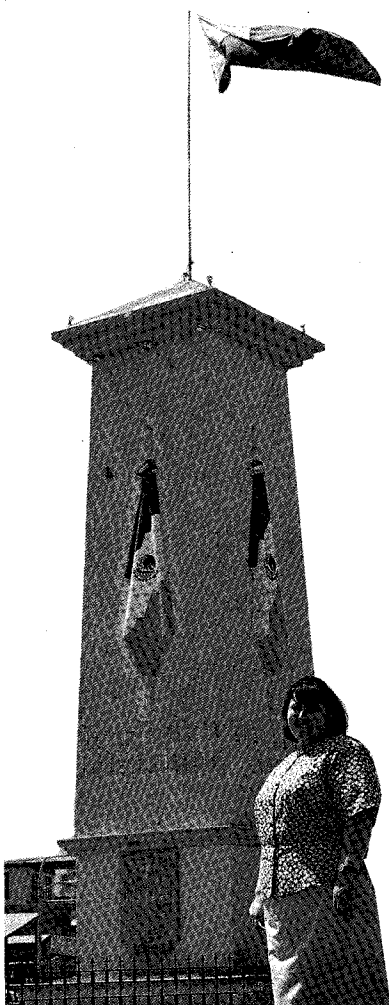
# すべて真実だったのです

マイラ・メルセデス・ベレス・ローマン

「わかったわ。お話を聞きましょう。」メキシコシティーにある私の家を訪問してもよいか、という若い宣教師たちに私はこう答えました。「でも意見を交換するだけです。自分の信じていることについてはよくわかっていますし、あなたがたの教会の会員になるつもりはありませんから。」宣教師たちに初めて会ったのは、フローレス家族の家庭の夕べの席でした。その夜、まさか宣教師の訪問に応じることになるうとは、想像もしていませんでした。まあ、たった1時間のことだし、と私は自分に言い聞かせました。それでも宣教師たちとは縁が切れるのだから。

その次の週、きっかり約束の時間にドアをノックする音がしました。少なくとも時間には正確なようね、と思いながらドアを開けると、ふたりの若々しい顔をした青年がレッスンを始めるのが待ち切れないという様子で立っていました。

自分の宗教に対して攻撃を受けるものとばかり思っていた私は、最初は防御的な態度をとっていました。しかしそうではなく、宣教師たちは天父が私と同じように肉体を持っておいでになることと、その御子が私のために亡く



マイラ・ベレス姉妹（左）は1992年8月から1994年3月までメキシコ・レオン伝道部で伝道した。故郷にあるメキシコ国旗記念碑の前で。（上）

なられ、やがて復活されたこと、そして聖霊は私の心に語りかけることができると話してくれました。すべてがとても論理的でした。彼らは続けて、イエス・キリストがかつてアメリカ大陸を訪れられたことと、モルモン経という名の本にその記録が記されているこ

とを伝えました。

私にそのつまらない本を売りつけられると思ったら大間違いよ、と私は心の中でつぶやきました。ところが驚いたことに、彼らの説明によれば、もうすでにだれかがその本の代金を支払っていて、私に期待されているのはそれを読むことだけだということではありませんか。神のみ言葉が書かれてあるのは聖書だけだと感じながらも、無料だというだけの理由で私はその本を受け取ることになりました。

2度目の訪問で、長老たちは私にバプテスマを受ける気があるかと尋ねました。私は「バプテスマはもう受けています。赤ん坊の時に受けましたが、一生に1度でいいはずでしょ」と返事しました。宣教師たちは、バプテスマは浸礼によって行なわれるべきことと、自分の行動に責任の取れる年齢とされる8歳になってから、罪の赦しのために受けるのだと説明しました。私は心の奥では、自分がバプテスマを受けた時に罪のない状態だったことを知っていました。そのうえ、私の受けたのは浸礼によるバプテスマではありませんでした。私が彼らの宗教をもっと詳しく勉強してみようと決心したのは、この時でした。

そして宣教師たちの教会を訪問し始めましたが、いつも早めに切り上げて自分の教会の礼拝に出席していました。訪問すると、教会の人々は皆、まるで長年の知り合いのようにほほえんであいさつしてくれることに気づきました。私を改宗させようとしているだけだわ、と私は自分に言い聞かせました。雰囲気はいいし、レッスンは興味深いけど、それだけよ、と。

モルモン経には触れようもしない私でしたが、長老たちとの話し合いは続けていました。1820年に父なる神と御子イエス・キリストにまみえたという少年ジョセフ・スミスについて学びました。以来、新しい時代が始まり、失われた真理が再び世を照らし始めたというのです。そんなことがほんとうにあり得るのでしょうか。その質問への答えは祈りによってのみ得られます、と宣教師たちは言いました。そして非常に簡潔な祈りの方法を教えてくれました。誠心誠意信仰を持って尋ねるならば、神は私の祈りにこたえてくださるとのことでした。一瞬私の心は和らぎましたが、すぐに怖くなってしまいました。もしほんとうに神がこたえてくださったらどうしたらよいのでしょうか。もし彼らの教えがほんとうだったら……。

次に宣教師たちがやって来た時、彼らは私たちは皆生まれる前に天父とともに前世に住んでいたこと（前世などほんとうに存在するのかしら、と思ったものです）、そしてこの地上に来たのは肉体を得るためと、善悪を選べるようになるためだと説明してくれました。もし善を選んでいけば、私たちはいつか神のようになれるというのです。これは神への冒瀆<sup>ぼうとく</sup>ではないのでしょうか。

私は自分に問いかけました。私のような者がどうして完全であられる神のようになることができるのでしょうか。宣教師たちはまた、肉体を大切にしなければならぬと説明し、知恵の言葉と純潔の律法を守れるかと尋ねました。自分でも驚いたことに、彼らの教会を信じてもないのに、私はそのふたつの標準を守ることに同意していました。

5度目のレッスンで<sup>じゅうぶん いち</sup>十分の一、断食、そして貧しい人たちのための献金について教えられた時、これはもう限界だと思いました。自分こそ助けを必要としているというのに、どうして他人を助けなければならないのでしょうか。しかし長老たちは、末日聖徒は十分の一と断食献金を納めることを特権だと考えていると説明し、「主はあなたにりんごを10個与えられ、そのうちの1個だけを戻すように求めているらっしゃるのです」と教えました。「なんと恵み深いお方でしょう」と。

10個与えて1個戻させるくらいなら、初めから9個くださればいいじゃないの、と私は心の中でつぶやきました。とはいうものの、いつも経済的に苦しんでいた私は、もしかしたら、これは私が主に対して公正でなかったからなのだろうかと思いました。

最後のレッスンで、宣教師たちはそれまで教えたことを一つ一つ復習し、末日聖徒イエス・キリスト教会の使命を説明しました。そしてもう一度バプテスマの話を持ち出しました。私は、バプテスマを受けさせようとしても無駄よ、と心の中でつぶやきました。そして宣教師たちに向かって激しい口調で話し始めました。その晩のレッスンは、私が宣教師の言うことはすべて間違っていると切り切ったところで終わ

りました。宣教師たちは悲しそうに私の言葉を聞き、聖句を引用して答えようとしましたが、私はそれを遮って彼らに帰ってほしいと言ったのでした。

やっと私は宣教師から解放されたのです。確かに人間的には気立てのいい人たちでしたが、教会の代表者としての彼らとはもう縁を切りたかったので。それなのに、心の中がこんなにむなしなのは一体どうしたことでしょうか。

それから6週間余りたったある日曜日の午後、宣教師たちがまたやって来ました。この時宣教師のひとりが、モルモン経を1週間で読み切るのは私には無理だろうとほめかけたのです。私はその言葉に挑発されてしまいました。彼らの取るに足りない本が読めないとも思っているのかしら、と感じたのです。1週間どころかもっと短期間で読んでみせるわ、という気になりました。さらに、私はモルモン経について一応の結論を出しているというのに、次の火曜日に3人で一緒に断食する提案にも同意したのです。

以前読み渋っていたにもかかわらず、その晩モルモン経を読み始めるや、本を置くことができなくなっている自分に気づきました。私は眠るのも忘れて午前3時まで読み続けました。翌日は仕事がありましたが、手が空いたわずかな時間も惜しんでモルモン経を読みました。そして午後家に帰るやいなや、まるで磁石に引きつけられる鉄のように、また読み始めたのです。

その晩、宣教師を紹介してくれたフローレス家族を訪ねました。そしてバプテスマを受けようと考えていることを伝えたのです。フローレス兄弟は本気なのかと尋ね、私はうなずきました。



**家庭の夕べに招き、宣教師を紹介してくれたフローレス家族とペレス姉妹。(中)**

するとフローレス家族は、翌日の宣教師と私の断食に自分たちも加わろうと言ってくれました。その夜、再び夜明け近くまでモルモン経を読み続けました。

火曜日の朝、私たちはそれぞれ自宅で断食を始めました。私は一日じゅう

すばらしい気持ちに満たされ、空腹も渇きも感じませんでした。午後になって、私はある聖句を読んでいて心が揺り動かされました。「永遠の来世に行く準備ができるように私たちに与えられている現世の……後から夜のような暗やみの生涯がやってきてそこへ入ったら何の働きもできるはずがない。」(アルマ34:33) 私はひざまずいて、今学んでいるこの教会が真実であるか、そしてこの教会に改宗すべきか天父に尋ねました。そして、耳を澄ませてい

ると、これが確かにイエス・キリストの教会であることを魂の奥深くに感じました。私はこれ以上引き延ばしてはいけないのです。その夜断食を終えると、私は宣教師たちにバプテスマの決意を伝えました。ふたりの顔は喜びでいっぱいになりました。

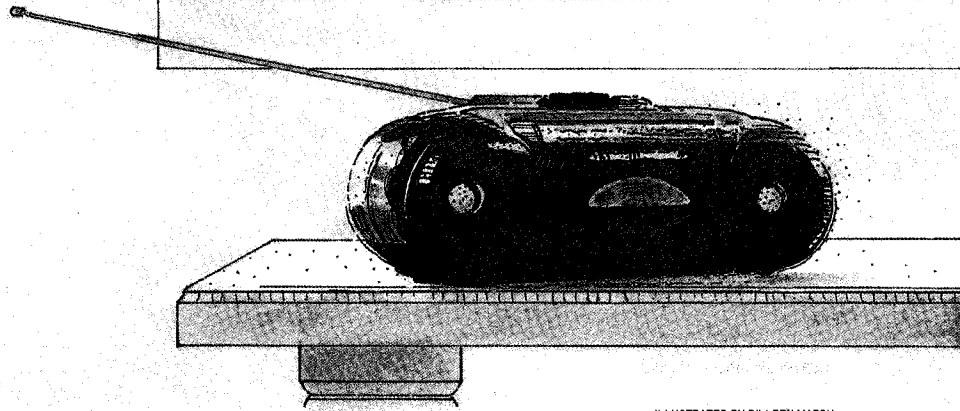
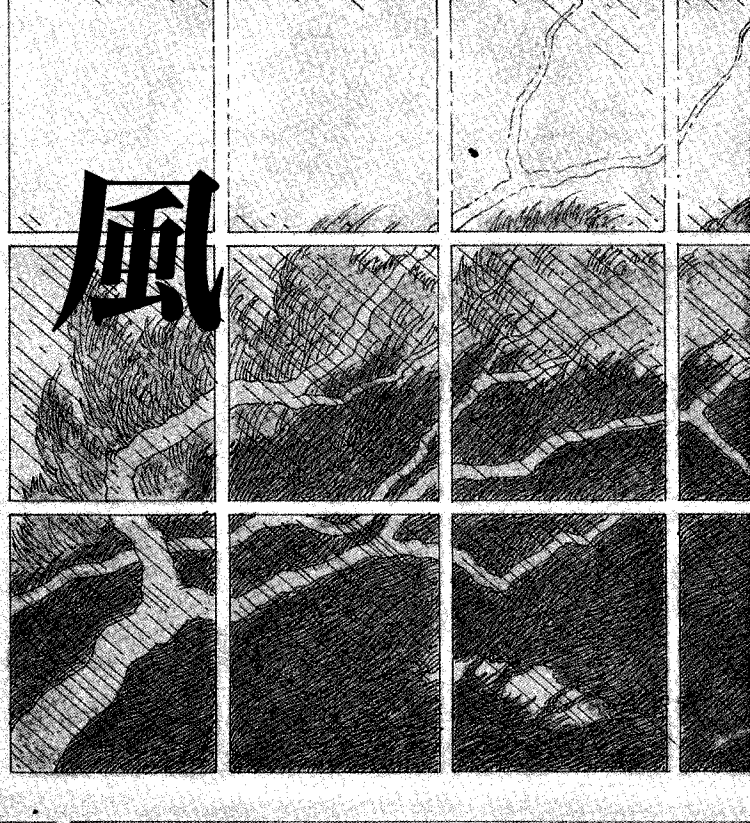
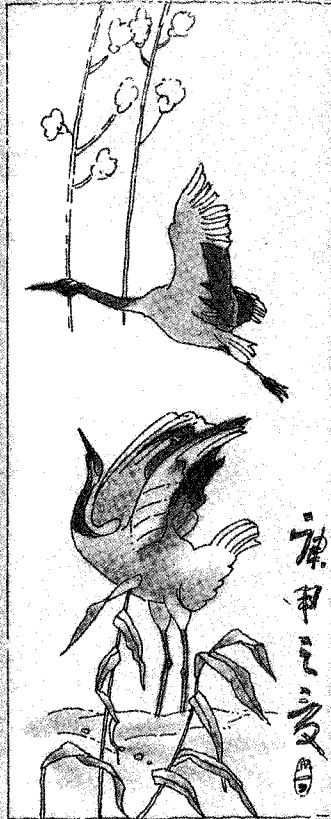
それから私は昼夜モルモン経を読み続け、読み始めてから6日半で読み終わりました。とうとうやり遂げたのです。宣教師たちのチャレンジにこたえることができたのです。読み終えて、二度とモルモン経を「取るに足りない本」などと呼んだりしないと思いました。今では私にとって、イエス・キリスト<sup>あかし</sup>を証するもう1冊の、偉大な本となっています。その後、サタンが私の行く手にいくつもの障害を置こうと試みましたが、私は1990年2月19日にバプテスマを受け、晴れて末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になることができました。

結局すべて真実だったのです。神は私たちを限りなく愛されたがゆえに救いの計画を与え、ご自身の独り子を犠牲として与え、私たちがみもとに戻れる道を備えてくださったのです。ジョセフ・スミスは父なる神と御子に確かにまみえ、真理を回復するために神に選ばれました。末日聖徒イエス・キリスト教会には、儀式を執り行ない誓約を与える神の権能があります。私たちは、その誓約に忠実かつ真実であれば、日の光栄の王国に入ることができるのです。

フローレス家族と宣教師たちに会えたことを毎晩神に感謝しています。彼らは皆、私が主の尊い福音を聞き、それを受け入れるように、主のみ手の器として働いてくれたのです。□



# 台風



ILLUSTRATED BY DILLEEN MARSH

小野紀子

**夏**が終わりを告げる9月のことでした。台風13号が日本列島に向けて北上していて、テレビやラジオのアナウンサーの伝えるところによれば、その台風は私の住む地域の近くに上陸する可能性があるといいます。私は2年前に日本を直撃した台風のことを思い出しました。外の木立ちは大きく揺れ、窓には強風が吹きつけました。非常な恐怖を覚えたものです。その台風が再びやって来るのです。今度の台風は前回のものに匹敵する勢力がある、とラジオは警告しています。

ヘルメットをかぶった私は、幼い子供をしっかりと抱き締めて、非常用の袋を集め始めました。随分前に非常用袋をいくつか用意したのですが、別々の場所にしまったままになっていたのです。台風が通過するのは午前3時ごろと見込まれていたので、1日ばかりで袋を集め、中身の確認をしました。

袋に入っていなかった薬を店まで買いに行き、家族歴

史をはじめそのほかの記録類も袋に詰めました。水道が止まったときのために、浴槽に水を張りました。こうして、思いつくすべての備えを済ませると、おびえながら夫の帰りを待ちました。

そんな時、3歳になる娘が、おびえている私を見上げて、こう言いました。「お母さんのために、私、天のお父様にお祈りしてあげる。」娘の祈りに耳を傾けているうちに、平安な気持ちに包まれ、きっと主が守ってくださると確信しました。そして主人が帰宅するころには、物質的な面でも心の面でもなんとか台風を迎える準備が整いました。

時間が過ぎ、恐れていた深夜が近づいてきました。ヘルメットと靴、非常用袋をすぐ持ち出せる所に置くと、私たちは床に就きました。

さいわいにも、台風はそれほど害も及ぼさずに通過しました。台風一過の朝、私は起きてすぐに神様に感謝



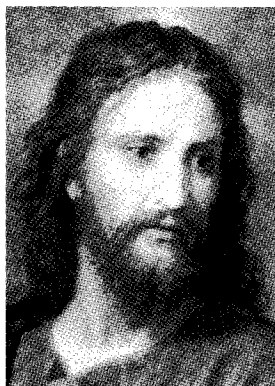
の祈りを捧げました。今回のように入念に台風への備えができたのは、テレビやラジオで強力な台風の上陸を聞き、行動に移せたからです。

この経験を通じて私は、主の再臨について深く考えさせられました。終わりの日が来ても、ラジオのアナウンサーが「本日、イエス・キリストがおいでになります。よく準備してください」と警告してくれるわけではありません。しかしかりに、主の来られる日がわかったとしたら、私たちはどうするでしょう。きつと残された時間を賢明に使うでしょう。家族歴史に真剣に取り組み、教会員でない友人と福音を分かち合い、もっと頻繁に神殿に参入し、食料貯蔵をするでしょう。準備のためにできることなら何もかも行なうでしょう。

しかし実際は、だれも主が来られる日を知りません。天父だけがご存じで、私たちにはまだその時が知らされていません。盗人が家に押し入るときのように、主は思

いがけない時に来られます。聖書にはこう記されています。「このことをわきまえているがよい。家の主人は、盗賊がいつごろ来るかわかっているなら、目をさましていて、自分の家に押し入ることを許さないであろう。だから、あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである。」(マタイ24:43-44)

確かにキリストのおいでになる日はわかりませんが、私たちは予言者たちが予言した数々のしるしを今日、目にしています。そして私たちに備えができていれば、その大なる日が訪れても、恐れたりしないでしょう。あらゆる面で備えをして花婿を迎えた思慮深い5人のおとめのように(マタイ25:1-13参照)、私も限られた時間を賢明に過ごしていきたいと思っています。□



やみ  
闇から光へ

たまもの  
悔い改めの賜

七十人  
ヘルベシオ・マーティンズ

ある有名なブラジルの詩人はかつてこのように記しました。「悔い改めた者の目には涙があふれ、その心には悲しみが満ちる。」

この言葉には、福音を知らない人の興味深い観察眼が表われていますが、その言わんとすることは、福音の原則と深い所で一致しています。

心からの悔い改めは深い悲しみをもたらします。人は、悔い改めへと向かう大なる旅路の不可欠な第一歩として、己の間違いを認めた後に、このような気持ちになります。この道を歩む以外に、自分自身が救い主と和解する方法はありません。

男女を問わず多くの人は、人生の旅路にあって、自分の行動が永遠の生命の原則に反していることを認めるといふ、きわめて重要な瞬間に直面することがあります。

私たちが称賛と敬意をもって尊ぶ多くの人々は、この困難であっても不可欠な経験をしてきました。ノア王の祭司であり、ニーフアイの子孫であるアルマのことを忘れることはできないでしょう。「アルマと言う年若い男……はアビナダイが祭司らに向って証をした罪悪が本当の事であるのを知ってその言葉を信じたから王に向って、アビナダイを怒らずにかれを放って安らかに出て行かせてくれと乞いねがった。

しかし、王はいよいよ怒ってその場からアルマを追い出させ、その上かれを殺すために僕たちにあとを追わせた。」(モーサヤ17：2-3)

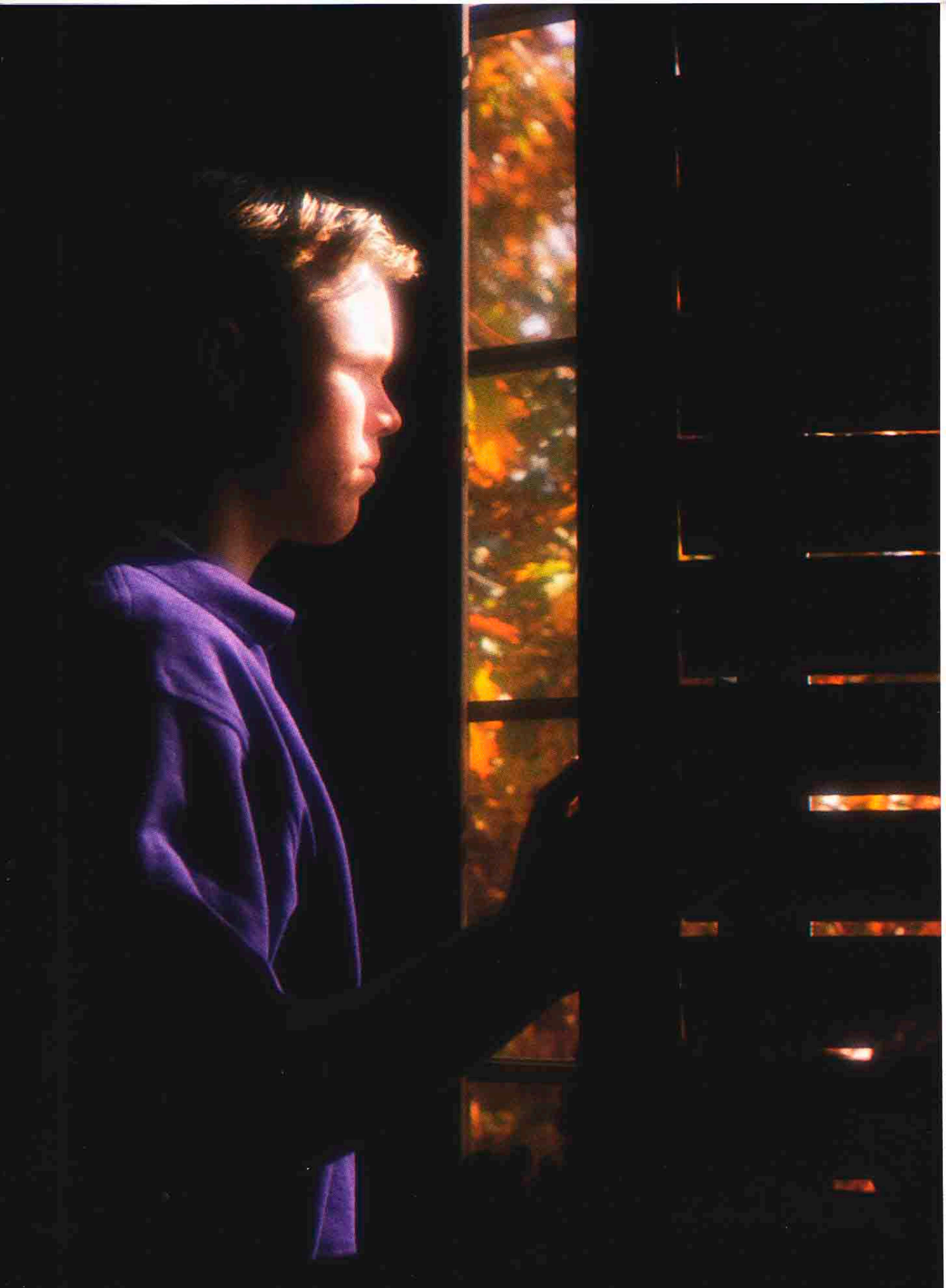
アルマは予言者アビナダイの言葉を聞くと、真実では

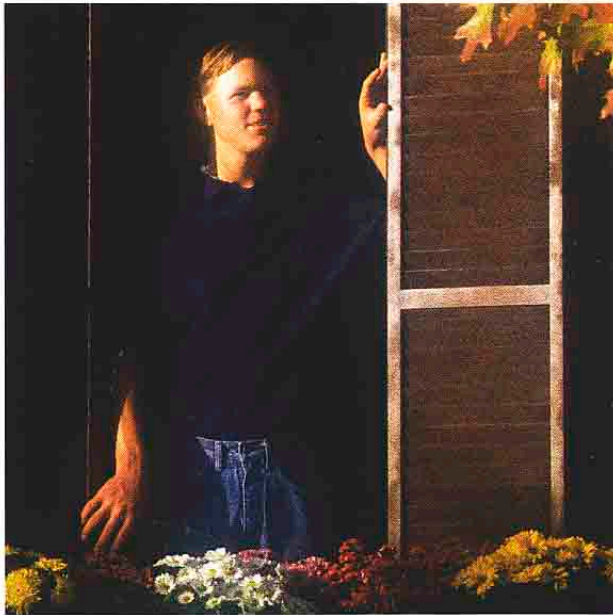
ない律法と教義の下で生活してきたという事実に直面しました。彼は明らかに後悔の念と悲しみを抱き、新しく出直す決心をしました。この決心は彼の行ないに大きな変化をもたらしました。そして、ノア王が自分と自分に従う者を殺そうとして軍隊を送ったことを知っていたにもかかわらず、アルマはひそかに人々の間を歩き回り、アビナダイの言った言葉を教えました。死者の復活と贖いについて宣べ伝え、それはキリストの力と死、復活と昇天によってもたらされると教えました。また、真理を聞きたいと願うすべての人々に、信仰と悔い改め、愛の教義を説き、新しい誓約を受け入れた者の生活を導く原則を教えました。(モーサヤ18章参照)

偉大な模範を示したもうひとつの例は、アルマの息子アルマとモーサヤの息子たちです。彼らも人生で最も重要な瞬間に直面しました。主のみ使いが雲の中から降りて来て、彼らの前に現われ、雷のような声で語り、彼らの立っている地を揺り動かしたのです。その経験によって、これらの若者の人生は驚くほど大きく変わりました。(モーサヤ27：8-37参照)

アルマとその友人たちが悔い改めたことを示す最も明らかな証拠は、彼らの態度が完全に変わったことに見られます。「人罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨つべければ、その悔い改めたことはこれによりて知るを得べし。」(教義と聖約58：43) 以前の生活様式を捨てることは、悔い改めの目に見える明らかな証拠です。







心の平安は悔い改めを通して得られる最も大きな報いのひとつです。完全な悔い改めをせずに、主に対して、また自分自身に対して平安な気持ちを感じることはできません。

人生はひとつのものをほかのものに変える過程です。闇を光に、悲しみを喜びに、苦痛を慰安に、苦悩を幸福に変えていくのです。罪を赦しに変えるには、悔い改めと呼ばれる変革を経なければなりません。悔い改めの機会は神から与えられたたぐいなき賜<sup>たまもの</sup>なのです。

だれもほかの人に代わって悔い改めの道を歩むことはできません。私たちに代わってそれをしてくれる人はいないのです。たとえ、父親がどんなに息子を愛していたとしても、息子に代わって悔い改めることはできません。悔い改めの段階は各自で踏まなくてはなりません。私たちは神に助けや支え、導きを求めることができます。聖霊を身近に感じることもあると思います。確かに聖霊は私たちに励まし、鼓舞してくださいます。しかし、悔い改めの道にあって踏むべき段階が、各個人に求められる要件であることに変わりはないのです。

同様に、報いと祝福も個人的なものです。救いは各個人に与えられる神の賜です。

永遠の幸福はそれを求めるすべての人に与えられる神の賜です。もし各自がそれを求めず、永遠の幸福にいつも心を向けていることをみずから示さないならば、それを受ける価値はありません。これはまさに理にかなったことに思えます。すべてのものは神からただで与えられる賜ですが、そこから得られる恩恵にあずかるためには、努力が必要なのです。

私たちが呼吸する空気は生きるためになくてはならな

いものですが、私たちの周りの至る所にあり、すべての空間に満ちています。しかし、その恩恵を受けるためには、各自が呼吸器の筋肉を使って空気を吸い込む努力をする必要があります。自分自身のためにこの努力をしないかぎり、空気が口と鼻に自然に入り、肺を満たし、細胞を再活性化するために血液をきれいにすることはないのでした。

同じ要件が悔い改めにも適用されます。それは賜であっても、信仰と知恵を用いて行使される必要があります。なぜなら、罪を告白して悔い改めた後、以前の状態へ戻り、同じ誤ちを犯すようでは、罪のない者とは見なされないからです。(教義と聖約58:43参照)

罪を告白し、捨てることは真実の悔い改めの特徴であり、そうして初めて人は祝福の恩恵を享受できます。しかし、この行動を取ることのむずかしさを私たちは理解しています。正当化や自己弁護、高慢が大きな障害物となるのです。

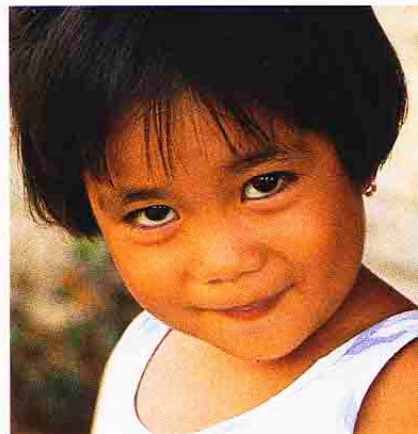
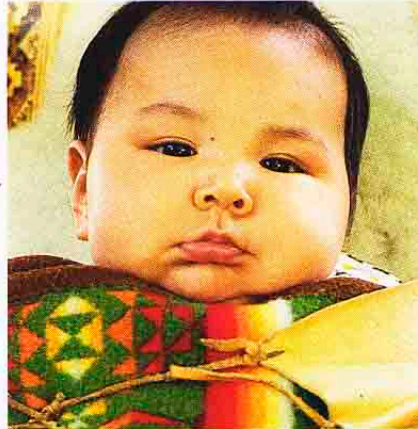
しかし、私たちが心からへりくだり、高ぶりを捨てるならば、主が私たちに助け、あらゆる障害物を乗り越えるのに必要な力を与えてくださいます。

「われは人を謙遜<sup>けんそん</sup>にするために人に弱点<sup>あつ</sup>を与え、すべてわが前にへりくだる者には充分わが恵みを受くるにより、かれらがわが前にへりくだりわれを信ずる時にはその弱きを強きに変えん。」(イテル12:27)

悔い改めは罪人を主の道へ連れ戻します。そして、闇から光へ導きます。永遠の原則と調和させ、正しい者の群れに戻し、聖霊と再び交われるようにしてくれます。その結果、この世における幸福と、永遠の世における完全な喜びへの扉が開かれるのです。□



# 「<sup>なんじ</sup>汝らの 子供たちを 見よ」



PHOTOGRAPHY BY CRAIG DIMOND, MARVIN K. GARDNER, PEGGY JELTINGHAUSEN, DAVID MITCHELL, RICHARD M. ROMNEY, SCOTT VAN KAMPEN, AND ALFRED W. WALKER

**復** 活した救い主はニーファイの民を訪れた時に、「小さい子供たちを一人一人近よせてこれに祝福を与え、かれらのために御父に祈〔られまし〕た。

そしてこれをしてしまうとまた涙を流〔されまし〕た……。

イエスが群衆に『汝らの子供たちを見よ』と仰せになったから、群衆がこれを見ようと顔を上げる時天を仰いで見ると、天が開けて天使らが火の中に取り巻かれているような有様で天降り、子供たちを取りかこんだので子供たちもまた火に取りかこまれ、天使らは子供たちに祝福を与え〔まし〕た。』(IIIニーファイ17:21-24)

以下の記事は、1994年1月23日にソルトレークタバナクルから衛星中継により放送された「汝らの子供たちを見よ」と題した教会のファイヤサイドからの抜粋です。





## 第一副管長

### ゴードン・B・ヒンクレー

子供の誕生以上にすばらしい奇跡がこの世にあるでしょうか。

小さな子供を見て、心を深く動かされた経験のない人がいるでしょうか。子供たちの肌の色、住んでいる場所がどうであろうと、彼らが御父からの貴い賜<sup>たまもの</sup>であり、御父の子供であるということを疑うような人がいるでしょうか。皆さんは、御父のみもとへ戻るには、幼な子のようにならなければならないという主のみ言葉の意味を不思議に思われたことはないでしょうか。(マタイ18：1-4

参照)

チャニング・ポロックはかつてこう語りました。「ある人々は……年老いた状態で生まれ、そして時とともに若く汚れなく、さらに純真無垢となり、最後は幼な子の真っ白な心をもって永遠の眠りに就ければと考えているに違いない。」(『この世の沈んだ染み』「リーダーズ・ダイジェスト」1960年6月号, p.77)

子供は純真無垢の典型であり、まさしく愛そのものであり、困難で混乱したこの世にあって、真の希望と喜びでもあります。

それにもかかわらず、虐待を受けている子供、顧みられることのない子供、怒りや卑しい利己心、極悪な行ないの犠牲になっている子供が数多くいます。

確かに今は、世界じゅうの人々に、永遠の父なる神に敵対する恐ろしい罪悪への注意をさらに喚起すべき時で



す。悲惨な状況に置かれた子供たちがいる所には、必ず神への敵対行為があります。嘆かわしいことですが、子供たちが苦しんでいる状況は、私たちの周りの至る所に見受けられます。

国じゅうに悲劇が満ちあふれています。これまでも幼児の虐待は絶えず存在してきたと思います。しかし、それが悲劇的な規模に発展しているように思えます。そのようなことについての情報が増えてきているからそう感じるのかもしれませんが。とにかくこれまで以上のことをなすべき時が来ています。私たちの周囲にいる、麻薬中毒の母親から生まれた子供、生活そのものが原因の悲惨な障害から逃れられない子供たちに目を向けてください。暴力を振るわれ、顧みられず、見捨てられ、性的虐待を受けているかなりの数の子供たち、苦しみに満ちた生活の悪夢にいつまでも付きまといわれている子供、飢饉や戦争の犠牲になっている子供たちに目を向けてください……。

救い主ご自身が次のように述べていらっしやいます。「わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる。」(マタイ18:6)

私たちは、教会のすべての子供のために、また全世界の子供のために祈っています。すなわち、彼らのうえに主の祝福が注がれて、彼らがこれまで以上に悪から守られ、義のうちに成長し、すべての人の父であられる神への愛を抱きながら歩めるよう祈っているのです。また両親のうえにも祝福が授けられて、小さな子供たちを守り育て、生涯にわたって平安の源となる福音の真理を彼らに教えられるように祈っています。箴言の作者はこう書いています。「子をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない。」(箴言22:6)

「<sup>なんじ</sup>汝らの子供たちを見よ。」神が皆さんの子供たちを常に祝福してくださいますように。







## 第二副管長

### トーマス・S・モンソン

私の〔初等協会の〕先生は素晴らしい人でした。結婚して間もない、若く陽気な女性でした。私たち10歳の男の子たちは彼女をひとつの理想として見ていました。彼女は男の子を動機づけるにはどうしたらよいかをよくわきまえていました。

彼女は、私たちがトレイルビルダー（訳注——過去の初等協会でのクラスの名称）のシンボルとして、また自分たちの達成したことや目標のシンボルとして首に巻いていたネッカチーフについて話をしてくれたことがあります。私たちはこの教師に全幅の信頼を寄せていました。初等協会の時代の中でも最も楽しい時でした。それはあ

の素晴らしい教師がいてくれたからです。礼拝堂は古くはなかったのですが、教室の数はじゅうぶんではありませんでした。台所を教室にして、みすばらしい黒板を使っていたように覚えています。私たちの教師は特に高い教育を受けていたわけではなく、りっぱな肩書きをいくつも持っているような人でもありませんでした。そういうものとは無縁の人でした。初等協会があんなに楽しかったのは、クラスの少年たちが特別に啓発されたり、著しく動機づけを受けたり、行儀がよかったりしたからではありません。むしろその逆でした。それは私たちを愛し、福音を教えてくれる彼女と私たちの間にとっても強いきずながあったからです。……

私の家の片隅に、銀色の柄のついた黒いつえが置いてあります。かつては遠い親戚の持ち物でした。私が60年間にもわたってそれを大切にしてきたのには、特別な理由があります。

初等協会の時代に私はワード部でクリスマスの野外劇





に出たことがあります。私は3人の博士のひとり演じる特権にあずかりました。頭にスカーフを巻き、肩にはピアノのいすカバーを羽織り、手にはその黒いつえを持って、私は自分のせりふを言いました。「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました。」(マタイ2:2)

その時のせりふをすべて思い出すことはできませんが、3人の博士として星を見上げ、舞台を横切って進み、幼な子イエスを抱いたマリヤを見つけるとひざまずいて拝し、宝の箱を開けて黄金、乳香、没薬を捧げた時の気持ちは、今でもいきいきとよみがえってきます。私は博士たちが幼な子イエスを裏切らず、邪悪なヘロデの所へ戻らないで、神に従い、別の道を通って行ったというくだりが特に好きでした。

あれから長い年月が流れました。忙しい日々さまざま出来事は、思い出に変わっていきます。しかし、あ

のクリスマスのつえは、今も変わらず我が家の特別な場所にしまっており、そして、キリストに従うという強い決意は心の中に息づいているのです。

デビッド・O・マッケイ大管長はこう勧告しています。「家庭生活の中には、子供の心に敬虔の念を目覚めさせ、はぐんでいく3つの影響力がある。ひとつ目は、穏やかでありながらもぐらつくことのない指導、ふたつ目は両親がお互いに、また子供たちに対して示す礼儀正しさ、そして3つ目は子供とともに捧げる祈りである。」(「インブループメント・エラ」1956年12月号, p.915)

子供たちに対する救い主の愛は無限のものです。私たちが親として、また神権指導者、初等協会の役員教師として主の模範に従い、「わたしの小羊を養いなさい」(ヨハネ21:15)というみ言葉を実践するなら、子供たちは皆さんの目の前で花開き、「ますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛され」るようになるでしょう。(ルカ2:52)



## 十二使徒定員会会員

### M・ラッセル・バラード

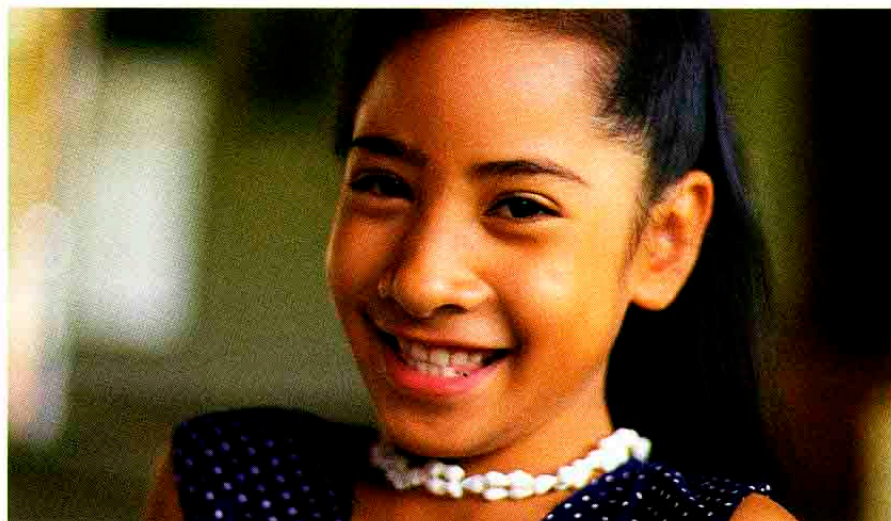
救い主はご自身に従うニーファイ人たちに、涙を流しながら「汝らの子供たちを見よ」と仰せになりました。(IIIニーファイ17：23) この時に主が「少しだけ見なさい」とか「気の向いたときに見なさい」とか、あるいは「彼らの全体的な動きをときどきちょっとだけ見なさい」などと言われなかった点に注意してください。主は「子供たちを見よ」と仰せになったのです。私にとってこれは、目と心をもって子供たちを見なければならぬという意味であり、彼らを神聖な特質を備えた天父の霊の子供としてありのままに見詰め、理解しなければならない

という意味です。

ほんとうの意味で子供たちを見るなら、永遠の父なる神の栄光、驚異と威厳とを見ることができます。幼な子はすべて、神の霊の子供です。生まれた子供の産声ほど、天父の實在と私たちへの愛を雄弁に証するものはほかにありません。……

貴い子供を託されている人が神聖で高貴な管理の職を授けられているのは明らかです。なぜなら、その人々は今の時代の子供たちを、愛と信仰の炎と彼らの本質への理解をもって包み込むよう、神より任じられているからです。

私たちが教えずにいて、子供たちはどうして人生で最も大切な事柄を理解できるのでしょうか。聖典には、両親は「すべての人は何所にあるもことごとく悔い改めざるべからず。然らざれば彼ら決して神の王国を嗣ぐこと能わず」(モーセ6：57)ということを子供に教えなければ







ならないと書かれています。子供たちは「祈ることと、主の前に正しく歩むこと」(教義と聖約68:28) また「真の道を行う事と真面目でなければならぬ事と互いに愛し互いに助けねばならぬ」ないことを学ばなければなりません。(モーサヤ4:15) また教会の子供は「どこに罪の赦しを求めらるか」(IIニーフアイ25:26) を理解し、「心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならぬ」(申命6:5) ことを理解する必要があります。

救い主はイザヤの言葉を引用し、ニーフアイ人にこう仰せになりました。「汝の子らはみな主に関わる教を授けられ、大いなる平和を受く。」(IIIニーフアイ22:13)

平和。子供たちの心に与えるべきものとして、これはなんとすばらしく、望ましい祝福ではないでしょうか。子供たちが心に平和を得、天父と永遠の計画への知識を

確かなものにするなら、彼らは自分を取り巻くこの世の不安にさらによく対処し、自分の神聖な可能性を実現する備えがもっとよくなるようになるでしょう。……

指導者や教師は……自分は単にレッスンを教える準備をしているのではないということを確認する必要があります。神の子供に教える準備をしているのです。レッスン、集会、活動はすべて、子供たちをキリストのみもとへ導くことに焦点を合わせなければなりません。……

忘れないでください。神にとってはどの子供も等しく大切な存在なのです。

神の愛は教会員に限って与えられるものではありません。子供たちへの神の愛に境界はなく、絶対に無条件のものであります。同じように、私たちが行なう神の子供たちへの愛の奉仕も、すべての子供に対して惜しむことなく豊かに捧げなければなりません。



## 中央初等協会会長

### マイカリーン・P・グラスリ

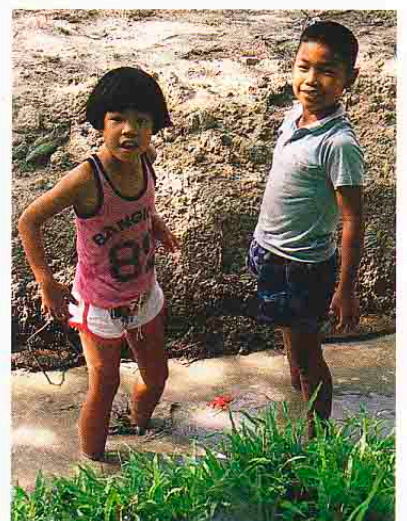
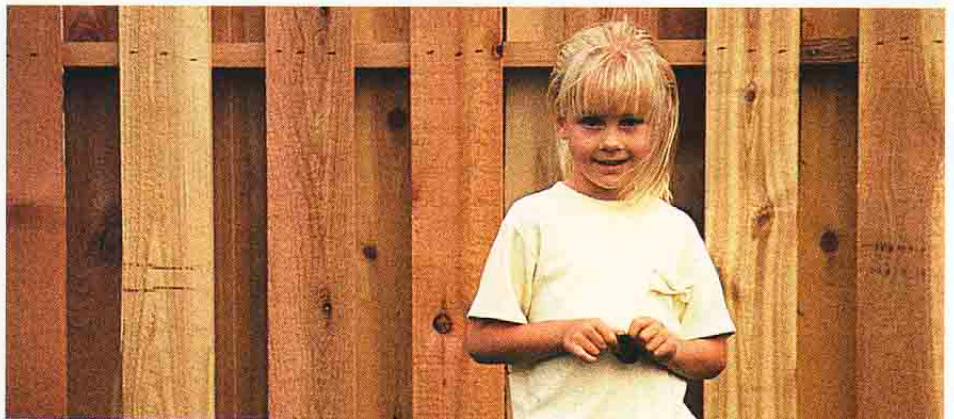
子供たちを理解してください。子供を教えるはぐくむのはたやすいことではありませんが、子供は心からの喜びと自発的な行動、率直な好奇心、無条件とも思える信仰を見せてくれます。私は落胆している人に、「子供を見つけて、しばらく遊びなさい。そうすれば気持ちが明るくなりますよ」と勧めることがよくあります。確かに、そうなるのです。

私が知るかぎり、子供との間により関係を築いているような人は、子供が成長する存在であることを理解しています。そのような人は子供を、その年代に適した方法で扱っています。……

私たちは子供の本質を見いだす必要があります。何が子供の関心を引き、何が彼らの悩みの原因となっている

かを理解しなければなりません。また彼らが自分のいちばんの夢を実現させたら、次に何をするかということも理解しておく必要があります。……子供の主体性を重んじ、親の言いなりになるよう期待すべきではありません。子供が自分で自分の関心事を見いだせるよう、さまざまな経験をさせてください。そして彼ら独自の関心事と才能を育てるように励ましてください。たとえそれが、親である自分の関心事や才能と異なっているとしてもです。子供の主体性を認めてください。

子供の言葉によく耳を傾けてください。ときとして私たちは子供を管理することに汲々とするあまり、彼らの声に耳を傾けるのを忘れてしまうことがあります。もっと聞く耳を持つようになれば、子供との関係をよくする方法を見いだせるでしょう。子供は、自分の言葉をよく聞いてもらい、理解してもらっていると思えば、親の言葉にもっとよく耳を傾けるようになるでしょう。心を開いて聞いてください。心に秘められた声に耳を傾けてください。……子供たちに考えを話してもらい、耳を傾けてください……。そうすれば〔子供たちの〕助けに





なる方法で対応することができます。子供が過ちを犯すのは、経験がないという理由だけによることが多いものです。

**子供に親切にしてください。**子供たちにそれぞれの親友や好きな先生、隣人、親戚<sup>しんせき</sup>について、彼らのどこがいちばん好きかと尋ねると、たいてい「とても親切なの」「私にやさしくしてくれる」と答えます……。

子供にやさしくするのは、だれにでもできることです。またいろいろな方法でできます。子供の親や教師でなくてもできます。自分がなすべきことのリストの中に、人への親切という項目を加えるのに時間を置く必要はありません。やさしいほほえみや言葉をかけるなどの簡単なことを、きょうから始めてください。たとえ子供に注意するときでも、声の調子をやさしくすることはできます。子供たちに注意を与えなければならないことはよくあります。……

**福音に対する自分の知識と証<sup>あかし</sup>を子供たちに伝えてください。**……皆さんの証を聞いた子供は、そんなに大切に思っていることを分かち合ってくれるほど、自分に関心

を向けているのだという気持ちになるでしょう。福音の原則を教えるとき、皆さんは生活規範という自分にできる最高の贈り物のひとつを子供に与えているのです。ヒラマンはそれを「人がその上に立つと倒れることのできない基」(ヒラマン5:12)という言葉で表現しています。……

子供との関係をよいものにするのはそうむずかしいことではないということを理解していただきたいと思います。だれにでもできます。……それは毎日完璧<sup>かんぺき</sup>に行なわなければならないというものでもありません。いくらかの時間と忍耐力、そして多くの祈りが必要です。ときには、ほんとうにむずかしい場合もあります。しかし努力する価値はあります。神が助けてくださるとひたすら信じてください。自分の心に浮かぶ感情や強い思いを信じ、それに基づいて行動してください。そうすれば、子供の生活に祝福を与え、さらには子供から祝福を受けることでしょう。□









# 父さん、 ありがとう

ジュリアン・ダイク

**私**が若いころ、家族は寝室がひとつしかないアパートに住んでいました。私は居間のソファをベッド代わりにしていました。そのころの私は、何にもましてスポーツ選手になることを望んで、体にいいと言われたことは何でもしました。中には疑わしいアドバイスもありましたが、役に立つこともあるかもしれないと思ってとにかくやってみたものです。チョコレートは食べない方がよいと言われたので口にしませんでした。炭酸飲料を飲むと「持久力が落ちる」と言われたので、1滴も飲みませんでした。寝るときには新鮮な空気が入るように窓をいっぱい開けるとよいと言われ、一年じゅう窓を開けたままで寝ていました。

製鉄所で働く父は、毎朝とても早い時間に家を出ていました。出かける前に、父はいつも、私が開けた居間の窓をそっと閉め、毛布を掛け直し、少し立ち止まりました。父がソファのわきに立って私を見詰めているのを、よく私は夢うつつの状態を感じたものです。寝たふりをしていると、父は頭を垂れ、静かに、しかし思いと力と精神のすべてを注いで私のために祈ってくれました。

毎朝父は、その日が私にとってよい1日となるように、安全に過ごせるように、また将来に備えて、何かを学び取れるようにと祈ってくれました。また、夕方までそばにいてやれないからと、その日私と接する教師や友人の

ためにも祈ってくれました。

スポーツ選手になるという私の夢はかなえられ、中学、高校時代、私はフットボールと野球の選手として活躍しました。フットボールの試合はたいいてい金曜日の夜にありました。当時、平日は郊外で働いていた父でしたが、金曜日の午後となると仕事を早く切り上げ、車で6、7時間もかけて試合を欠かさず見に来てくれました。試合開始の時間に間に合ったことは一度もありませんでしたが、いつもコーチが、選手用の入場許可証を父のために手配してくれていました。試合の前半戦の途中でふと目を向けると、父は席に腰を下ろし私を見守っていました。また日曜日の午後、教会の集会が終わると父は急いで仕事に戻らなければなりませんでした。

最初は、毎朝父が私のために祈りを捧げる（きま）るの意味がよくわかりませんでした。しかし、年を重ねるにつれて父の愛を感じ、父が私に対して、そして私のするあらゆることに対して関心を示してくれていたとわかるようになりました。これらは、私にとってかけがえのない思い出のひとつです。それから何年かたち、結婚して子供ができると、私も、眠っている子供たちの部屋に入って彼らのために祈るようになりました。このころになってようやく、父がどのような思いで私を見守ってくれていたか、はっきりと理解できたのでした。□

# 愛によって結び合わされ

アナリス・プレント-ペリス

チ エコ・N・岡崎姉妹の言葉のように、私たちの人生は互いに結び合わされて、友情と親切という美しい模様となっていることがわかりました。（『思いやりという「あや取り」』「聖徒の道」1993年7月号、p.87参照）

私は15歳の時に、故郷のオランダ、ティルバーグで、末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師と初めて出会いました。私の両親は、このふたりの若い宣教師がとても気に入って、宣教師から娘さんを教会に招待してもよいかと尋ねられた時、快く承諾してくれました。私はクリスチャンの家庭で育ったので、天父のことについてはよく知っているつもりでした。しかし、人生について、また、天父が私たちのために備えてくださった計画については、まったく考えたことがありませんでした。やがて私は、教会の集会や宣教師のレッスンを通して、真実の福音を見いだしました。私の人生は変わりました。そこで、両親からバプテスマを受ける許可をもらおうとしましたが、許してくれませんでした。それでも、天父の戒めに従って生活しようという私の決心は変わりませんでした。

ちょうどそのころ、私は自分より少し年上の若い女性アンスと知り合いになりました。後で彼女が話してくれたのですが、彼女は真理を探し求めていて、私の福音に対する熱意に感動し、教会のことを勉強する決心をしたのでした。彼女は別の町に住んでいたため、深く話し合う機会はありませんでしたが、後日、彼女が教会に入ったことを知りました。

これと同じころ、私は別の友人アンジェラを連れて、若人を対象としたキャンプに出かけました。この経験を通して、アンジェラは教会について学ぶ決心をしました。そして数カ月たって彼女もバプテスマを受けたのでした。彼女はアメリカへ移り住みましたが、私たちは連絡を取り合い、その後もふたりの友情は続きました。

残念ながら、私の人生はアンスやアンジェラに福音を紹介してからというもの、別の方向へ向かっていったのでした。私はドルドレヒトへ引っ越して、教会から離れてしまい、バプテスマを受けなかったのです。ただ、教会に対する私の考え方や人生への取り組み方がどうであれ、アンスとアンジェラが私との連絡を絶つことはありませんでした。ふたりは福音についての話は避け、私に質問があるとき、いつでも答えてくれました。私は信仰

を完全に失ったわけではなく、それは私の心に絶えることなく作用し続けていました。そんな時アンスが私の家の近くに引っ越してきました。そこで私たちの友情は急速に深まったのです。アンスはよく私に会いに来てくれました。また、ちょっとしたささやかな行ないを通して私に愛を示してくれました。

今私はすばらしい夫と結婚しており、かわいい子供がふたりいます。1年ほど前に私は市の図書館でこの教会の歴史について書かれた1冊の本に巡り会いました。私はこの本を精読し、開拓者たちが経験した苦難について記されたこの本に大きな感銘を受けました。彼らは福音のゆえに数多くの試練に遭遇しましたが、堪え忍びました。この本を読んで私の証がよみがえりました。そしてこの教会が真実の教会だということを知りました。

バプテスマを受けたいと告げた時のふたりの友人の驚きは大変なものでした。アンスと私はバプテスマの後で喜びの涙を流しました。アンジェラはその場に出席できませんでしたが、彼女の支えと励ましを感じました。

このふたりの友人を備えてくださった天父に心から感謝しています。この何年間というもの、私たち3人の人生は互いに結び合わされ、ひとつの模様を形作ってきました。その模様は年を追うごとに、より鮮明になってきました。私は、岡崎姉妹の語られたことを心から信じています。「私たちは冷淡であったり、無関心であったり、狭い心で人に接したりすることはできません。神にしか見えない模様かもしれませんが、私たちは皆つながっていて、その模様を形作っているのです。」（『思いやりという「あや取り」』「聖徒の道」1993年7月号、p.88）

私の求道者時代は15年にも及びました。私に最初に福音を教えてくれた宣教師は私の証が弱くなるのを見てがっかりしたことでしょう。しかし、彼らの伝道の業は無駄ではありませんでした。もし彼らが種をまいてくれなかったら、今の私はなかったと思います。彼らの働きにどう感謝していいかわかりません。私は宣教師のまいてくれた種をほかの人と分かち合いました。そして彼らが、今度はお返しに私の心にまかれたその種を気長に養ってくれたのです。こうしてついにこの種は喜びのうちに花を咲かせ、私と友人の心が信仰と愛によって結び合わされるまでになったのでした。□



上——アナリース・プレント-ベリスと友人のانس。  
中央——バプテスマを受ける以前のもの。夫のレナ，息子のトミーと娘のカローラ。下——最近の写真。子供たちと一緒に。



PHOTOGRAPHY BY GEORGE KRAANEN. EXCEPT FAMILY GROUP





# しっかり！

カール・ピーターソン

**祖**父のローズは、重い心臓病でした。祖父の看病で大変な祖母の力になればと、私たち家族は交替で祖父母の家に泊まって手伝いをすることにしました。母とおばがいちばんよく寝泊まりしましたが、ある週末、私が付き添ってもよいか尋ねました。

こうしてその晩、私は祖父のベッドの傍らに置かれたいすに腰を下ろし、休んでいました。祖父はその晩いつになくよく眠っていました。そして私がちょうど寝入りそうになった時、突然、祖父がこちらに寝返りを打ちこう言いました。「カール、しっかり！」そしてまた反対側に寝返りを打って寝てしまいました。

それがどういう意味か、すぐにはわかりませんでした。私は別に悪い子というわけではありませんでした。でも、それからは眠れませんでした。そして祖父がどういう意味で「しっかり！」と言ったのか、眠れぬままに考えていました。

それから数日というもの、自分の生活の中でしっかりする必要のあるのは一体どういう面か考え続けました。それから数日後、また祖父の背中をさすりに祖母の家に行きました。その後でいすに座って祖母と話をしました。祖母は私にこう言いました。「カール、おじいさんはね、あなたが主のために伝道に出たいと強く望む子になるよう、いつも祈ってるのよ。」

その日の晩、私はいつものように器械体操の練習をし

ていました。コーチが私にもっと集中しろとどなるのが聞こえました。先ほど祖母の話してくれたことと、これから下さなければいけない決断のことで頭がいっぱいで、とても体操の練習どころではありませんでした。このまま体操で奨学金をもらって大学に進むべきか、それとも伝道に出るべきか心底悩みました。

その夜遅くベッドで横になりながら、「カール、しっかり！」という祖父の言葉を思い起こしました。そして自分の優先順位は、しかるべき順序で並んでいるだろうかと考えました。やはり、私は間違っていました。優先順位の最初に主とのみ業ではなく、体操を置いていたのです。そしてついに祖父の言った言葉の意味がわかりました。もっとしっかりとした思いと心を内に持つ必要がある、という意味だったのです。そのためにすべきこともはっきりとわかりました。つまり、これからは教会に集い、セミナーにもちゃんと出席するのです。

「しっかり」するための努力を始めて間もなく、私はモルモン経を初めて読み通しました。その時、予言者モロナイの勧めに従ってモルモン経について、さらに、ジョセフ・スミスについても祈ってみました。私はこのような努力を通じて、伝道に出たいと強く望むようになっただけでなく、世の光であり、命であられるイエス・キリストを見いだすことができたのです。□



## 家族の証

88歳の祖母のバプテスマにより、  
4世代が末日聖徒に

東京北ステーク部浦和ワード部  
松本文香

1994年3月20日、主人の祖母岡崎せん姉妹がバプテスマを受けました。バプテスマ会には、浦和ワード部の多くの会員が集ってくださり、私たち家族が見守る中、儀式は厳かに執り行なわれました。これで、ひとつ屋根の下で暮らす家族全員が、そして4世代が末日聖徒になったのです。

岡崎せん姉妹は、戸籍上では明治40年2月25日生まれですが、実際には明治39年、埼玉県浦和で生まれました。理髪業をしていた岡崎敏一と結婚し、東京で理髪店を営んでいましたが、昭和17年、戦火に追われて再び浦和に移り住みました。その後、平成元年3月19日に祖父が他界するまでの30年間、彼女は個人病院のお手伝いさんとして働いていました。

その時彼女は、82歳を過ぎ、老人特

有の手足の震えや難聴がひどいことなど、だれが見てもひとりりで住むのはとても心配な状態になっておりました。そこで、彼女の長男夫婦は同居をしようと、彼女の住んでいた家売り、別の土地を買って自分たちの新しい家を建てました。祖母は住み慣れた家も土地も離れ、友達もいない新しい土地で長男家族との新しい生活が始まりました。しかし、それから4年、なかなか互いになじめず気苦労の多い日々のようなでした。

昨年秋、小学3年生の娘が学校の社会科の授業で祖母にはがきを書いて送りました。すると、しばらくして喜びの電話がかかってきました。長男夫婦の家族としてひとつ屋根の下に住んでいるにもかかわらず、ひとり暮らしの老人のように、ポーッとただ時を待つだけの生活になっていた祖母にとって、自分をやさしく思いやってくれるひ孫の言葉がとてもうれしかったようです。主人の母が長女なので、祖母は

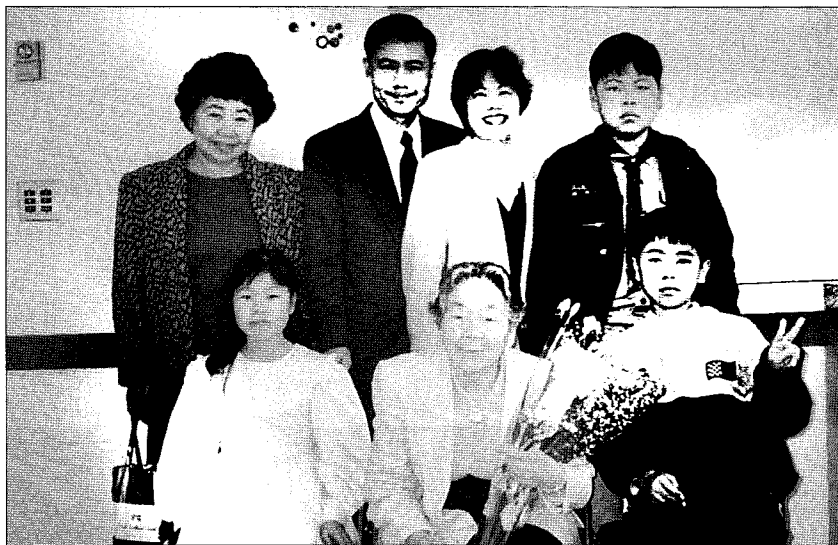
何度となく泊まりに来ていましたが、そのたびに彼女の心の傷が深くなっているのがわかりました。

私は昨年インスティテュートで、パウロの書簡を学んだ時に、私も彼のように手紙で伝道ができることに気がつきました。それはちょうどその電話がかかってきた直後のことでした。今の祖母の状態では、とても彼女は救われないと感じ、霊界へ行く準備をさせてあげたいと思いました。そして、人を赦すことの大切さや、イエス様を通して祈ることにより得られる平安や喜びについて、また、その祈り方などを書き、早速手紙を送りました。

数日後の朝電話がありました。「眠れない夜が続いていたのに、お祈りしたらよく眠れた」という内容でした。でも、舌がもつれたような話し方でしたし、その日は夕方まで家族がだれもいないと言うので、主人の母とともに急に祖母に会いに行きました。その急な訪問が、幸か不幸かお嫁さんの気分を害して、その翌日の朝には祖母を連れに来てほしいと電話がありました。それは昨年10月21日のことでした。

その日以来、祖母は私たち家族と同居することになりました。最初は浦和市から車いすを借り、出かけるときは車いすを使用しました。遊びに行くときも、教会に行くときも、家族として行動する我が家の習慣によって、祖母も行動をともにしてくれました。そのため、今ではひとりりで歩けるようになり、車いすは不要になりました。

主人は祖母に次々とチャレンジを与えました。食事の祈り、家庭の夕べでの割り当て、「聖典からの物語」から始まって聖典を読むこと、朝の家庭の集いで賛美歌を歌い、祈り、聖典の輪読に参加することなどです。祖母は今ま



松本ご家族。後列左から、栄いご姉妹(母)、かつみ・文香ご夫妻、ひでみ兄弟(長男)。前列左から、まみ姉妹(長女)、岡崎せん姉妹(祖母)、まさほ兄弟(次男)。

# バプテスマ会での証

で経験したことの無いことを、不平ひとつ言わずに従順に次々と行ないました。そんな祖母の姿は、私たちにとってすばらしい模範でした。

同居して2カ月になるころ、「宣教師から福音を教えてもらうようお願いしたらどうだろうか」と主人から話が出ました。快く承諾した祖母の元に、今年の1月に姉妹宣教師が来てくださり、週1、2回の集会が始まりました。3人のすばらしい宣教師が、年老いて耳の遠くなった祖母に福音を教えてくださいました。88歳を迎えようとする祖母が福音に耳を傾け、イエスの教えを受け入れたのです。バプテスマのチャレンジには不安はあったようですが、これまでの罪が洗い流され、自分が清められることが心にしみたようでした。福音を学び始めて1カ月後には、バプテスマを受ける決心ができていました。3月20日主人の手により、祖母は88歳でバプテスマの水をくぐりました。

主人が姉とともに改宗したのは1976年1月24日、その半年後に主人の母が改宗し、その18年後に母の母が改宗しました。私たちの3人の子供たちもそれぞれ8歳の誕生日にバプテスマを受けましたので、同居している4世代が末日聖徒になりました。

無意味に時を過ごしていた日々とは違って、祖母は朝から夕方まで、聖典を読み、庭に出て散歩をし、犬にえさを与え、朝夕の新聞を運び、ひ孫と遊び、娘と語らい、自分のできることは自分でやり、毎日の生活に喜びを見いだしています。そして安息日には教会へ行き福音を喜び味わっている祖母は、我が家でいちばん幸福そうに輝いて見えます。先日、「生き返ったようだ」と話す祖母を見て、主の大いなる恵みを今さらながらに味わいました。そして祖母は今、来年神殿参入することを目標に励んでいます。

主は実に生きてましまし、私たちに大きな愛を注いでくださり、導きと慰めと喜びを与えてくださいます。祖母の同居と改宗を通して私たちにたくさんの祝福をもたらしてくださっています。主の心から感謝いたします。(まつもと・ふみか 日曜学校家族歴史コース教師)

東京北ステーク部浦和ワード部  
岡崎せん

**皆**様、こんにちは。本日は皆様ののおかげでバプテスマを受けることができました。ほんとうにありがとうございました。

私は岡崎せんと申します。どうぞよろしくお願ひいたします。それから、ただ今おおぜいの皆様に見ていただきましてほんとうにありがとうございました。

先日、私はバプテスマを受けた夢を見ました。水の中に立ち、男の人から水に沈められた夢でした。そのことを家の若い者に話したら、「あら、よかったじゃないの。神様が受けるように教えてくださったのよ」と言ってくれました。それから2、3日して今度は<sup>あんしゅれい</sup>按手礼の夢を見ました。「按手礼」と書かれた紙があちこちに置いてあり、それを拾い集めている夢でした。また、家の若い者に話したら、「あら、おばあちゃん、よかったわね。やっぱり神様が按手礼を受けなさいと教えてくださったんだわ」と言ってくれました。それから、聖書を読んでおりますと、今度は老人は夢を見ると書いてありました。ほんとうだと思いました。「神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。」(使徒2:17)

また、家の若い人たちが「宣教師に

来ていただこうかしら」と言ってくれましたので、早速来ていただき、いろいろなことを教えていただきました。私もいろいろと覚えました。家の人たちも面倒を見てくれましたので、私も助かりました。神様のことは、今まで何も考えたことがなかったのですが、いろいろと聖典を読んでいるうちに、イエス様のことを知ることができました。映画でもイエス様のことを見せていただきました。ほんとうにイエス様は何もかも感心することばかりで、ありがたいお方だと思いました。それから、教会へ行くと、皆様が親切で、いろいろな方にお目にかかれるし、家のひ孫もみんな親切で、教会という所はほんとうに気持ちよい所だと思いました。

先日、家庭の夕べをいたしました時、「次の家庭の夕べで、おばあちゃん、何か活動をしてください」と頼まれました。その時、何をしたらよいのかまったくわかりませんでした。そこで天のお父様にお祈りしました。するとよい考えを思いつきました。それは庭の小石を使った石当てゲームでした。早速庭に出て小石を拾い集め、積もっていた雪で洗って家庭の夕べで使いました。天のお父様は私の願いを聞いてこたえてくださいました。神様が生きておられ、祈りを聞いてくださることを証<sup>あかし</sup>します。これからも元気でいつまでもできるだけ続けていきたいと思ひます。このお話と証をイエス・キリストのみ名によっていたします。アーメン。(おかざき・せん)

## ぼくのひいおばあちゃん

東京北ステーク部浦和ワード部  
松本英己

**ぼ**くは、ひいおばあちゃんが来て、家族の人数がひとり増えて7人になってから、家の中がもっと明るくなったような気がします。ひいおばあちゃんは、88才だから入れ歯がときど

きガチガチ音をたてたり、口から息をするので、鼻歌を歌っているようなりズミカルな声を出したりもします。それに耳が遠いから大声で話します。ぼくたちもひいおばあちゃんにわかるように大きな声で話すようになりました。ぼくたちが話しかけたり、遊びにきそったりすると、ひいおばあちゃんはすごく喜びます。そして何事にも「へ



えー」とか「あれ、まあ」とか言ってよくおどろきます。そしてよく笑います。だから、とてもにぎやかです。

家庭の夕べもひいおばあちゃんがいちばん楽しんでいるみたいです。月曜日の朝になると「きょうは家庭の夕べの日だね」と言ってぼくたちに確認します。それから、自分の割り当てをよく果たすために準備をきちんとしてい

ます。お父さんのチャレンジも毎日きちんと実行しています。それに毎日時間がたくさんあるから、ずっと聖典の勉強をしています。だからひいおばあちゃんはえらいなあと思います。ぼくの家に来る前は、本も読まなかったみたいなので、やっぱり神様を知って変わったのかなと思います。教会に毎週行くことも楽しみみたいです。

ぼくは、ぼくの知らない昔のことを話してくれたり、家族の中でいちばん楽しそうにしているひいおばあちゃんといっしょに過ごせるようになってよかったと思います。何よりも家族全員がバプテスマを受けてひとつになって、神様に喜ばれるように同じ生活ができるのがいちばんいいなと思います。(まつもと・ひでみ)

## 教会に出かけるのが何よりの楽しみ

仙台伝道部郡山地方部会津若松支部  
稲月正雄

1992年10月ごろ、私は宣教師と出会い、モルモン経を初めて読みました。聖書は10年ほど前から読んでおりましたが、むずかしいところは意味がわかりませんでした。でもモルモン経と教義と聖約を読んでいるうちに聖霊に導かれて、天父の祝福で昨年の2月7日にバプテスマを受け、神の僕となりました。私は80歳の老人です。私の年齢を聞けば退屈を持って余す老人とお思いになるでしょう。妻は20年前に天に召され、現在ひとり暮らしです。息子たちは独立して家を離れ、娘はそれぞれ嫁に行き、孫が13人、ひ孫がふたり、みんな元気で、これも主のお恵

みと感謝しております。

私は桐のたんすや家具のほか、小さな物を作る工場に勤めています。朝6時起床、洗顔、まずお祈り、それから昼の弁当を作り、食事をして7時には家を出ます。自転車にて15分、会津若松駅へ。工場は下り線喜多方の手前の塩川にあり、駅から約10分、自転車工場へ。午前8時から午後5時10分までが私の勤めの時間です。帰りは午後6時8分の上り電車で会津若松へ。家に帰り、まず、きょう1日無事に過ごせた感謝の祈りを捧げ、夕食。後は自分の時間です。モルモン経や聖書、その他の聖典の予習復習、また「聖徒の

道」の大管長会メッセージ、兄弟姉妹たちの苦労や悩み、またお手本となる忍耐や努力に感激の涙を流して読むときがしばしばあります。年のせいでもろくなったかな？ 教会の先輩たちの親切、雪や氷も解けるような温かい気持ちですべての事柄を教えてください。毎週安息日に、教会に出かけるのが何よりの楽しみです。

先日、夜、こんなによい教会になぜもっと早く入らなかったのかなあ、もう5年、いや10年早かったらなあ、とつぶやきながら床に就いたら、私の耳元に声があり「5年10年などと何を言っているのか、これから20年頑張ればいいではないか」と。

朝になって、これから20年頑張れることを神が約束してくださったと思ったら、元気がもりもり。夕方疲れた体で帰って来ても、お祈りによって明朝までには元の元気な体に癒して下さる、愛ある天父に感謝しています。霊的な事柄にも自分の仕事にもますます励んでいきたいと思っています。これも全能の神、天父と御子イエス・キリストのお導きとお恵みであり、また先輩の兄弟姉妹たちのおかげと感謝いたします。5月の中ごろには神殿に参入することができ、またこの年になってもなお働けるという最大の幸福に、感謝感激胸いっぱいです。(いなづま・まさお)



孫たちと写す。最上の幸福である

# 夫婦宣教師の証

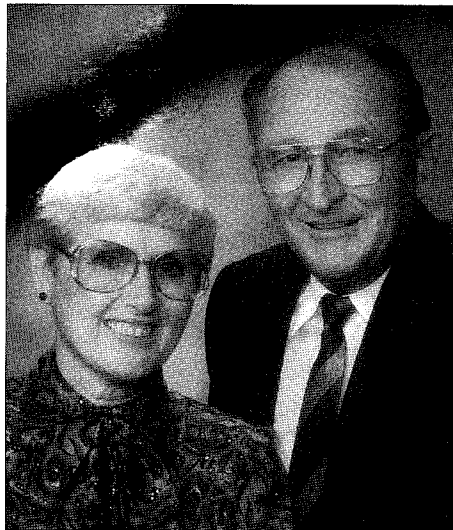
## みたまの声に導かれ

東京南伝道部夫婦宣教師  
トム・ジェームズ

「いつか、ふたりで伝道に出よう。」ロバータと私がそんな計画を持ち始めたのは、実に、私たちが神殿で結婚する前からでした。人生というものは、計画や夢がなければ、あまり多くのことを達成できずに過ぎてしまいます。

時折私は、「<sup>みたまの</sup>聖霊の賜の用い方を、自分は何れほど理解しているだろうか」と不安になることがあります。ただ主に尋ねさえすればよいというときでも、何もせずに主のみたまが私を動かして助けてくださるのを、じっと待つことができることがよくあります。長い信仰生活を通じて少しずつわかってきたのですが、もしみたまが語りかけているときにそれを聞き分けられなかったら、私は非常に限られた範囲でしか聖霊の賜を用いていないこととなります。また、みたまについて知れば知るほど、さらにこの偉大な力を求め、活用できることも学びました。主のみたまは、実にすばらしい助け手です。私たちがりっぱな国民、しっかりした両親、忠実な息子・娘、そして信頼できる働き手となるように導いてくださるのです。

皆さんがよくご存じの元アジア北地域会長会長のW・ユージン・ハンセン長老は、みたまのささやきに耳を傾ける方法を学ぶことがいかに大切か教えてくださいました。1年前、ハンセン長老から、日本で伝道する気はないかと尋ねられたことがあります。私は、もう少し身の回りの整理をして、2、3年したら伝道に出たいと思いますと答えました。ハンセン長老がすぐに伝道に出よう勧めたにもかかわらず、私は後にすると行って聞かなかったのです。



ジェームズご夫妻

### ◆「名指して語りかける声を3度耳にしました」

ある夜、眠りから覚めた私は、名指して語りかける声をはっきりと耳にしました。その声は3度こう言いました。「伝道に出なさい。」翌朝、私はこの経験についてだれにも話しませんでした。

1カ月後、監督から電話があり、ステーキ部長が私の伝道に出る予定時期を知りたがっていると聞かされました。ステーキ部長の手元には、ソルトレークにある伝道管理部から調査書が届いていたのでした。私は監督に、身辺整理をして2、3年後に出るつもりでいますと伝えました。

私は、65人の従業員を抱えて事業を営み、そのほかの責任や活動にも携わっていました。当時の私にはそれらの方が伝道よりも大切に思えたのです。スカウト活動に深くかかわり、理事を務めていました。さらに、ほかのいくつかの組織にも属し、大いに楽しんで

いました。孫たちも大きくなり、彼らと一緒に過ごす時間は私の喜びとなっていました。キャンプや釣りをはじめ、いろいろな活動をともに楽しんだものです。人生は絶好調でした。教会のためにもう一度伝道に出たいとは思っていましたが、「今すぐでなくても」という気持ちがありました。

1カ月して監督から再び電話があり、いつなら伝道に出る準備が整えられるかと聞かれました。私の計画は相変わらず、「今ではなく、2、3年してから考える」というものでした。今伝道に出るよううるさく言う監督に、私としては少々閉口していました。監督には、「考えてみます」と言ったものの、伝道について本気で考えてみる気はありませんでした。一方、妻のロバータは、すぐにでも伝道に出たがっていました。

### ◆がんの宣告を受けて

そんなある日、1通の手紙が届きました。夫婦で健康診断を受けて、伝道に関する質問に記入するようになっていました。これは別に伝道に出るようという召しではなく、単に伝道に出る準備のためのものだったので、友人の内科医の所に行き、診断を受けました。健康状態は良好と言われ、書類を作成し送付しました。しかし、しばらくして病院のほうから血液検査の結果が届き、自分ががんにかかっていると知らされました。もうひとりの友人の医師からは、がん手術の結果次第では、あと1、2年伝道に出られないだろうと言われました。それは私の伝道の計画にはなかってはいました。

とはいえ、私はもうひとりの医師を訪ねることにしました。すると、手術



を受けずに放射線治療を受ければ伝道に出られると言われました。こうして私は、前立腺がんの放射線治療を受けることになりました。

しばらくして、ソルトレークシティーから、日本東京南伝道部に赴任するという伝道の召しが来ました。宣教師訓練センターに入所後も、私の放射線治療は続きました。治療を受けに毎日病院に通いました。そして、日本へたつ少し前、がんが完全に直ったという血液検査の結果が出ました。完全な快復にはあと1年はかかると見込まれていたのです。

伝道に出る前、実はロバータもがんに冒されてしまい、家族全員が非常に心配しました。皆で何度も祈り、頻繁に神殿に参入しては全快するよう、主に嘆願しました。私たち夫婦の名前はいつも祈りのリストに載せられ、家族や友人皆が私たちのために祈ってくれました。私たちはがんが癒されることについて、何の疑いも抱きませんでした。

私たちは、愛する主が必ず私たちの祈りを聞いて、癒してくださると確信していたのです。事実、主は私たちの祈りをかなえてくださいました。信仰を持って主の助けを請い、聖霊に聞き従うなら、家族は一層豊かな祝福を神様から受けることができます。私たちには神の助けが必要なのです。

#### ◆再び40年前の伝道地に

こうして私が今日、日本にいるのは、主がこの地に私を必要とされたからです。私が備えをするのは少しゆっくりでしたが、妻はすぐにでも伝道に出たいと望んでいました。みたまが妻にその時を知らせたからです。ハンセン長老も私たちが伝道に出る時期を知っていました。私は初め、みたまの声にあまり耳を貸そうとしませんでした。聖霊はあきらめずにいてくださいました。ロバータをはじめ多くの人々の祈りのおかげで、今私はこの地にあって素晴らしい機会を享受しています。ここは、40年前に私が伝道に来た所なのです。

ユタは私たちの故郷であり、それはこれからも変わりませんが、今は、日本こそ私たちの新たな故郷となっております。

り、伝道部長が望むことならどんなことにもこたえて、主に仕えていきたいと思っています。私たちは日本の人々を愛していますし、日本の食べ物と文化も大好きです。ここで人々と親しくなり、彼らの家庭で語り合える機会に感謝しています。特に、何十年も前に知り合った友人たちに感謝しています。日本でのあらゆることが、私たちにとってすばらしい経験となっています。

私たちには、若い宣教師たちのようなじゅうぶんな体力はありませんが、多少なりとも貢献できると思っています。家や家族については少しも心配していません。我が家には今だれも住んではいませんが、それも気がかりではありません。子供たちがときどき家の手入れをしてくれていますし、何より、主がすべてを見守ってくださるからです。

私たちは主を愛しています。そして、主のみたまが日本の地に注がれて、すべての教会員がみたまの声を聞き分け、絶えることのない導きを受けられるように祈っています。神は生きておいでになります。キリストは生きていらっしゃいます。このような理解に基づく教会は、世界にひとつしかありません。ジョセフ・スミスが神のみ声を聞き、モルモン経を翻訳し、この最後の神権時代に完全な福音を回復したことに、心から感謝しています。

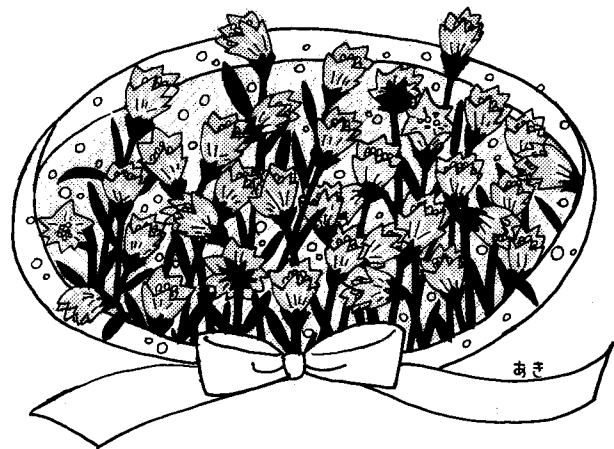
#### ◆「皆さんは今でも宣教師ですか」

最近、東京の吉祥寺で帰還宣教師の大会が開かれました。そこで話し合いの司会を務めた兄弟が、出席者全員に

こう尋ねました。「皆さんは今でも宣教師ですか。」かつて宣教師だっただけか、それとも常に宣教師として働いてきたかということです。私たちは、赴任した伝道地からは解任になっても、人々と福音を分かち合う責任からは、決して解任されないのです。神はこの国を祝福してこられましたし、これからもそうされるでしょう。私たちは皆さんを心から愛しています。

伝道活動は雄々しく推し進められています。私たち教会員も、伝道活動の一端を担うために、人々に福音を紹介する機会を探し求めなければなりません。バプテスマを受けようとしている人々を助け、教会にあまり活発に来ていない人々が再び集うように励まされなければなりません。教会員が宣教師に紹介した人ほど、教えやすく、バプテスマに至りやすい人はいません。私たちは皆、この大いなるみ業をもっと速やかに推し進めていかなければなりません。今のままでは、私たちに求められていることをすべて成し遂げていく、じゅうぶんな時間がないかもしれません。

教会員には、伝道だけでなく神殿でのみ業もあります。おそらく私たちにも、ゆっくりと休息に就く日がいずれ訪れるでしょう。しかしそれは、今この時ではないのです。皆さんはみたまの声に耳を傾けているでしょうか。それとも、監督からの電話が鳴るのをじっと待っていますか。(アメリカ、メープルトンステーク部メープルトン第1ワード部出身)



# 私たちの東京神殿

## — 神殿宣教師になって —

横浜ステーキ部大船ワード部 小室 敬

**私**が60歳の定年退職を迎えたのはおよそ1年半前のことでした。それまでの約37年の末日聖徒としての生活の中で、教会のために専任で働いた経験が私にも妻にもありませんでした。そこで夫婦で神殿宣教師として働く決心をし、教会本部に申請をしました。ところが、あいにく神殿の宿舎がふさがっていて1年ほど待つように言われ、一時はあきらめようとも思いました。しかし待っている間にイスラエルやモルモンの開拓者が歩いた道のりをたどったり、保険などの手続きも済ませたりして身辺や気持ちの整理をすることができました。そして何よりもよかったと感じているのは東京神殿が新しい方向に動き始めたこの時期に働く機会を得たことです。今では、1年待ったのは主のみこころであったと強く感じています。

昨年の9月10日から神殿宣教師として働いていますが、宣教師になってまず感じたのは、時間の制約がととても厳しいことです。宣教師になるまでは週2日の奉仕をしていたので、それが5日になっても神殿の隣の宿舎に入るので大したことはないと思っていました。しかし、神殿宣教師の日々は週2回の奉仕の時には想像もできなかったほど忙しく、食事の時間が1時間足らずなので、料理をしている暇はなく、その辺にある食物を胃に流し込むのがやっとです。そして休日となる月曜日は、1週間分の食物の買い出しをして、平日にそれを温めるとすぐに食べられるように調理するので、大変忙しい1日になります。さらにかつて私は、神殿の儀式執行者として10年以上奉仕してきたので、神殿の専任宣教師に召されるとすぐに、結び固めの奉仕業務の管理者に召され、「グリーンビーン」(新米)の時から神殿の役員会に出席するようになり、なおさら忙しくなりました。ほんとうに神殿宣教師の生活

は時間との競争のようです。平日に、神殿の団体参入があって朝から儀式があると、朝7時から夜9時過ぎまでの12、13時間以上の労働となり、睡眠時間が6時間くらいしか取れません。ですから土曜日の夜は1週間の疲れと睡眠不足のために、10時間以上も寝てしまうことがあります。

次にときどき聞かれるのは「神殿宣教師は何をするのですか」という質問です。そう言われて考えてみると「神殿で働く人」と漠然と考えていて、一体何が目的なのかわからずにいたようですが、今は「皆さんが神殿に参入して儀式を受けるのを助ける役目」だと自分なりに解釈しています。今年に入ってから参入するグループ内で儀式を進行できるように、儀式執行者または限定の儀式執行者を召して訓練するようにしていますので、近いうちに皆さんの手で、神殿の儀式が進行できるようになるでしょう。

教会の発展とともに東京神殿も国際的になり、外国からの参入者が増えていますので、英語に対応できるように頑張ってきました。そして最近スペイン語にもチャレンジしており、その

ほかの国の言葉でも儀式ができるようになりたいと思っています。

私は神殿宣教師になってから、今までは神殿をお客さんのような気持ちで外から見ていたことに気づきました。皆さんも神殿に行くという考えを捨てて、私の神殿、私たちの神殿という考えを持っていただきたいと思います。神殿は主の宮居です。そして私たちの家です。エンダウメントや洗い清め、結び固めなどすべての神殿の儀式を皆さん自身が受け、そして執行できるように早くなってほしいと願っています。

私は各地から来られる熱心な会員の皆さんとお会いするのを楽しみにしており、参入された皆さんがよい経験を積み、みたまを感じて帰られるお手伝いができることを心から感謝しています。そして、主のみ業が日本の隅々まで広がり、末の日を迎えるまでには多くの神殿が日本に建てられると思います。

ステーキ部長からは任命の時に楽しく働いてきなさいと祝福されましたが、つらい時もあります。けれども、皆さんの熱心な会員たちと会うときに元気が出てきます。そして主の宮居で働ける喜びを味わうことができるのです。これからも神殿宣教師として、また、神殿の儀式執行者として、救いを求めている皆さんの亡くなったかたがた、参入される会員のかたがたのために働き続けたいと願っています。(こむろ・けい 祝福師)

## 神殿宣教師になって得た多くの祝福

横浜ステーキ部大船ワード部 小室幹子

**私**が長い間のあこがれだった神殿宣教師に任命されたのは、61歳の誕生日を迎える月でした。ステーキ部長から受けた<sup>あんしゅれい</sup>按手礼は、主のみ業のエネルギーをかいま見たように思えるほどすばらしい経験でした。私たち夫婦は、宣教師になるまでに10年以上も前から、週に2日神殿の儀式執行者として東京神殿にお手伝いに行っていました。それが3日多くなって5日に

なっただけだからあまり変わらないくらいの気持ちでしたが、宣教師になってみると心構えから違っていました。JMTC(日本宣教師訓練センター)のファイヤサイドでアジア北地域会長会第二副会長のサム・K・島袋長老から受けた教<sup>じゅうぶん</sup>えは「あなたがたは<sup>いち</sup>自分の一を納めますね。それは主のもので。あなたたちの時間も自分のものではなく主のもので」また、「義務感でし





小室敬ご夫妻

た行ないでは主は悲しまれます。心からの愛をもって行なってください」で

したので、さらに気持ちを引き締めました。

神殿宣教師になってからも至らない私なので、随分と皆様にご迷惑をかけていますが、私はできないながらも一生懸命に務めましたので、主は私にすばらしい祝福の数々をくださいました。まず、主人の健康が祝福されたことです。ある時は、朝5時に起きて6時から夜の9時過ぎまで働き、その後夜中の12時までかかって5人の若者に祝福師の祝福を授けていましたが、翌朝はまた、5時に起きて元気に働いていました。宣教師になる直前に当時のアジア北地域会長会会長だったW・ユージン・ハンセン長老が主人とひざまずいてお祈りをしてくださったおかげです。

そして、自分が主にふさわしくないところはどこかがよくわかり、悔い改めも楽にできるようになりました。そして私は、全部で6回も手術を受けた3級の身体障害者ですが、神殿の宿舍と横浜の自宅の2軒の家を掛け持ちしても、主のお仕事を休まずにできるよ

うになりました。また、60の手習いでピアノのけいこを始めて指一本で弾いて楽しんでいましたところ、祈り会の伴奏者に召されました。今までにこんなに苦しんだ責任はないほどむずかしい経験になりましたが、毎日の練習で少しずつ上手に弾けるようになりました。また英語での儀式を習いましたが、よくもまあこんなに英語を覚えられないものだと、自分で感心するくらいでした。しかし主の助けで英語で儀式ができるようになってきました。

また家族のうえに祝福があり、孫たちにも「福音を恥としない」精神が定着しているようで感謝しています。娘夫婦の薬局も開業したばかりなのにこの不景気で心配していましたところ、鎌倉の大きな市立病院が近くにできて、その専属の薬局に指定され、仕事が増えて忙しくなり、心から感謝しております。私のような年寄りの病人でも、主の大切なみ業に使っていただけることをまれにみる幸せ者と心から感謝し証します。(こむろ・みきこ)

## 私の人生を変えたふたりとの出会い

東京北伝道部新潟地方部新潟支部 山川広子

**神**様は、あるふたりとの出会いをきっかけに私を改宗へと導いてくださいました。ひとりはアメリカで知り合った友人の田中安紀子姉妹、そしてもうひとりは夭逝した私の3番目の息子「健太郎」です。

1990年10月、私がちょうど妊娠8カ月のころ、私たち家族は主人の仕事の関係で渡米することになりました。産婦人科の毎月の定期検診では「異常なし」と診断され、男の子ということがわかっていたので、私たちはこれからの米国生活と生まれてくる子供への限らない期待とに大きく胸を膨らませていたものでした。しかし、この世に生を受けた健太郎は心臓、筋肉、骨、内臓……あらゆる器官に障害を持っていました。

アメリカへ来て3カ月で、まだ右も左もわからず、そのうえ保険にも入っ

ていない私たち家族は、ただただぼう然とするばかりでした。初めは何が起こったのかわからず、これはきっと悪夢で今夜寝て起きてみれば、きっと「ああ、よかった。夢だったのか」と言うに決まっていると思いながら、毎晩床に就いたのを覚えています。

日ごとかさむばく大な手術代、入院費用、それを会社に結局は頼らなければならない後ろめたさ、肉体的、精神的疲労などで、私たちはまさに身も心もずたずたの状態でした。お互いに挙げ足を取り合う口論も多くなり、夫婦関係も険悪になっていきました。そして脳の機能も正常でないことを宣告されて1カ月たったある日、私たちはもうこれ以上手術を施すことを断念しました。もちろんそれは、もうこれ以上手術をしても、この子は長くは生きられないのではないかという親としての

直感と、万一命は取り留めるとしても重度の障害児として、健太郎ははたして幸せな人生を送ることができるのだろうかという親の気持ちからでした。また生身の人間である私たち若い夫婦が肉体的、精神的そして経済的にも限界に達していたことも否めません。

その後10日ほどでその小さな命——この世で美しい景色を見ることのない命、妙な調べに耳を傾けることのない命、友達と人生を大いに語り合うことのない小さな命は、高熱に苦しみながら私の腕の中で天に取り上げられました。すべてが終わった時、私は「短い人の一生なのだから精いっぱいその時を楽しまなくては。おいしいものを食べ、行きたい所へ行き、きれいな洋服を着て、子供たちには、ただ自分のアクセサリのごとく知名度の高い学校に入れさえすればよい」などとまったくこの世的な考え方につかっていた。

健太郎が亡くなって1年を経たある日、特にすることもなくきょうも暇な1日を幼稚園のお母さん方との世間話



浩君を抱く山川広子姉妹  
と田中安紀子姉妹

それからというもの、私は手渡されたモルモン経を引き込まれるように一気に読んだのを覚えています。まるで乾いた土が水を吸うように、当時の私は義に飢え渴いてたのだと思います。今まで出会ったどの宗教とも違うこの宗教は、ほかと違って今も昔も揺るぎない永遠の観点からほんとうの幸せを迫及していることを私の霊が感じました。

その後、宣教師から福音を学ぶようになり「健太郎にもう一度会いたい。今度もし会うことがあるなら（りっぱな宣教師として天のお父様の下で働いているかもしれませんが）力いっぱいこの腕で抱き締めてやりたい。そして一言、彼に謝りたい」と思いました。ふたりの宣教師、そして田中姉妹とともに『神の子です』を歌う私のほおにとめどなく幾筋もの涙が流れました。この世の何よりも尊く清いものを見つけた喜びに体じゅうが震えました。「とにかく今までの自分と一刻も早く決別しなければならぬ。そして、健太郎が天のお父様とともにいる日の光栄へ行くべき準備を始めなければならない」と。

私はバプテスマの決意を固めるに至りました。そして宣教師から福音を学ぶようになって10カ月後の1992年12月15日、私はバプテスマにより再び生まれ変わることができました。その時は天から授かった尊い命も一緒でした。その後すぐに出産のため、日本の故郷、新潟へ帰りました。初めて新潟の教会に集った時のことです。臨月を迎える私のすぐ後ろに座った姉妹の耳に天から次のような声が聞こえてきたそうです。「この人は待望の神権者を産むでしょう。ですから、そう言ってあげなさい。」この姉妹の言葉に私の心はどんなに慰められたことでしょう。「ああ、この子は少なくとも神権を受ける

年齢までは生きてくれるのだ」と大きな希望を持つことができました。

翌年の2月、私は無事「<sup>ひろし</sup>浩」を出産することができました。そして、ちょうど出産した日のアメリカ時間の午後、ロサンゼルスにいる田中姉妹は自分の声のメッセージをテープに吹き込み、私に送ろうとしているところでした。「Feb 7, 1993」と記入されたそのテープは文字どおり浩への誕生祝いとなったわけですが、このテープは心も躍らんばかりに私を喜ばせてくれました。しかし、天のお父様は今から考えると、ただ私を喜ばせるためだけに田中姉妹を通してこのテープを送ってくださったのではないと、はっきり今感じることが出来ます。

「でもね、広子さん、<sup>あかし</sup>証はすぐに廃れるよ。常に新しい証をつくっていかなくてはだめ。」——そう、私たちは古い栄光にいつまでもとどまっているわけにはいきません。それによって自分の霊を喜ばすことはできないのです。バプテスマを受けたばかりの私は新しい証を得ることになぜかしりごみをしていました。神様はそんな私の心を見抜いておられたのかもしれませんが。

田中安紀子姉妹と健太郎——私に福音をもたらしたこのふたりとの出会いは私の人生を180度変えてくれました。

1993年4月の大会で、チエコ・N・岡崎姉妹が「思いやりという『あや取り』」という題で、次のように話されました。「私たちはおおぜいの人々と出会います。……その出合いを奉仕の願いにあふれた思いやりのこもったものとする事で美しい模様を作ることができます。」岡崎姉妹が言うように、神様を仲介とした思いやりのこもった美しい模様の織りなす「思いやりのあや取り」をこれからも田中姉妹と続けていければと思っています。

そして、私が心より悔い改め、健太郎とともに日の光栄の王国で住めるよう日々努力し、周囲の人々に神様の愛をもって奉仕するならば、彼も喜び、天のお父様を通じてたくさんの祝福を与えてくれる——そんな「思いやりのあや取り」を健太郎とできればと考えています。（やまかわ・ひろこ）

でつぶそうと誘いの電話をかけました。しかし、その日に限ってだれもが不在で電話に出ないのです。そこで私の頭の片隅に浮かんだのが田中さん（姉妹）の名前です。幼稚園でときどき送り迎えの時お見かけし、軽くあいさつを交わす程度の人でしたが、以前から少し気になっていた存在でした。ほかのお母さん方とは少し違う、何か超然としたところがあり、それでいていつも笑顔がこぼれている。また何か温かいものが伝わってくる。そんな田中姉妹の名前を思い出し、家にお招きしたのでした。

幼稚園の話から子供たちのことに話題が移り、そしてちょうど1年前に亡くなった健太郎のことを私たちはまったく自然に話していました。そして私がどうしてそう思ったのかははっきり覚えていませんが、夕食後、家族皆で食べようと取っておいた健太郎のバースデーケーキを姉妹に勧めていました。田中姉妹はとても恐縮し「頂く前にお祈りさせてください」とおっしゃいました。私は特に断わる理由もないままそうしていただきました。目をつむって彼女の祈りに耳を傾けた時の（祈りの一つ一つの言葉は定かに覚えていませんが）私たちのほかにだれかが聴いているという感じだけは、鮮明に心に残っています。

天父に対する彼女の心からの尊敬の念、そして身も心もへりくだっていることに裏付けされている威厳が、ぐんぐんとこちらに伝わってきました。



# 主により頼むふたりの愛ときずな

大阪北ステキキ部川西第1ワード部  
音 芳乃

6月19日、川西第1ワード部のワード部大会の折、扶助協会の姉妹たちは手作りの手芸作品を展示しました。その中で、浦浜フサ姉妹自作の俳句・短歌集「紫苑」が私たちの目を引きました。和紙にぼかしの色をつけ、墨色も美しく、みごとな筆跡で書かれた姉妹の歌は、読む人の心を打ちました。

浦浜フサ姉妹は1949年にご結婚、1975年6月21日清次兄弟とともに現在の豊中ワード部でバプテスマを受けられました。家を訪問された宣教師さんが、若いのに礼儀正しく柔和なのに引かれて、彼女はお話を聞き始められたとのこと。1980年11月21日、東京神殿で清次兄弟と永遠に結ばれ、以来ずっと忠実な教会員として過ごされています。

控えてめで誠実で努力家の姉妹は、俳句や短歌にご自分の気持ちを託したり、季節感を上手に歌に詠んでおられます。書道の変体仮名を先生につかずにお手本でおけいこされるなど、よほど意志

浦浜清次、フサご夫妻（1981年撮影）



が強くないとできないことです。

おふたりの信仰生活について浦浜姉妹は「夫が入退院を繰り返していた5年間は安息日を守れないこともありましたが、改宗以来、知恵の言葉、什分の一をはじめ、十戒などすべての戒めは苦にならず、抵抗なく守れています。夫が病気になって、夫を敬愛する気持ちが強くなり、手を取り合って神のみもとに行きたいと思うようになりました。聖典の勉強を熱心にするようになったのもこのころからです」と述懐されていました。

ここに紹介する短歌と詩は、5年前に亡くなられた浦浜清次兄弟が病床にあったころ、おふたりが詠まれたものと、今年、浦浜姉妹が詠まれ、「紫苑」に載せられたものです。

清次兄弟が書かれた短歌2首は兄弟

が亡くなられる3、4日前に、苦しい息の下でたどたどしく書かれたものを、姉妹が判読して書き記されたとうかがいました。これを読む時、箕面の病院で浦浜姉妹が私を廊下に連れ出し、医師からご主人の死の宣告を受けたことを涙ながらに話してくださった時のことを思い浮かべました。

また浦浜姉妹は、昨年の目の手術後、視界が狭くなり、ひざも悪いのに教会までの坂道を歩いて出席されるお気持ちなどを短歌に詠んでおられます。

これらの歌を読む時、主により頼む浦浜兄弟と姉妹の美しい愛と固く結ばれた永遠のきずなが感じられます。姉妹は兄弟の他界後も変わらぬ信仰を続けられ、その謙遜なお人柄は私たちみんなの模範です。（おと・よしの 日曜学校福音の教義クラス教師）

## 箕面市立病院にて

浦浜清次

衰える力よ、霊よ、肉体よ  
余命いくばく神の召しわも  
（お召しは）

試練とは、神に近づくことと知る  
遅まきながら われは悟りぬ

## 兵庫医大にて 夫、清次 兄弟闘病生活の折々

浦浜フサ

夫が痛めば 妻も疼く  
夫が渴けば 妻もかわく  
夫祈れば 妻ひざまづく  
夫眠れば 妻も目をとづ  
夫は妻をいたわり 妻夫を励ます  
試練に耐ゆる 夫婦善哉

## 短歌集「紫苑」より

浦浜フサ

今年こそ聖書完読胸に決め  
雑煮の餅をかみしめて食す

この坂は我にきびしき道なれど  
祈りの家に向かう喜び

苦にならず知恵の言葉を守りきて  
健やかなるを主に感謝する

安らぎは己に恥じぬ一日を  
振り返りみて満ち足りるとき

賛美歌は我的心をほぐすかや  
詩の心よみ雲は晴れゆく

つらき日も天父と亡夫に励まされ  
主の宮に行くこの坂登りて

すりへりし奥歯今なお噛みしめて  
安らぎ求め主の宮に行く

# 愛との出会い

大阪堺ステークス部岩出支部

鬼頭 奨

**私**は大正12年名古屋市に生まれました。今年71歳です。私が生まれて間もなく、両親は離婚し母は家を去りました。父も仕事の都合で家を空けることが多く、私は子供のころから、親の愛や家庭の愛にはあまり恵まれずに育ちました。16歳から軍需工場で働き始めました。そこでは機関銃を作っていました。昭和18年、私が20歳の時、父は65歳で他界しました。その年私は兵隊として召集され、中国南部に派遣されました。私が戦場に向かったころはすでに日本軍の形勢は芳しくありませんでした。そのため戦場には食料も弾薬も届きませんでした。戦場ではたくさん仲間たちが、目の前で死んでいきました。戦争で殺される人も多くいましたが、それ以上に伝染病で亡くなっていく人々がたくさんいました。そんな戦場で、どうして戦争をしなければいけないのかと苦しみました。

昭和20年8月15日、終戦になりました。しかし私たちの隊には本部から何の連絡もありませんでした。その日、

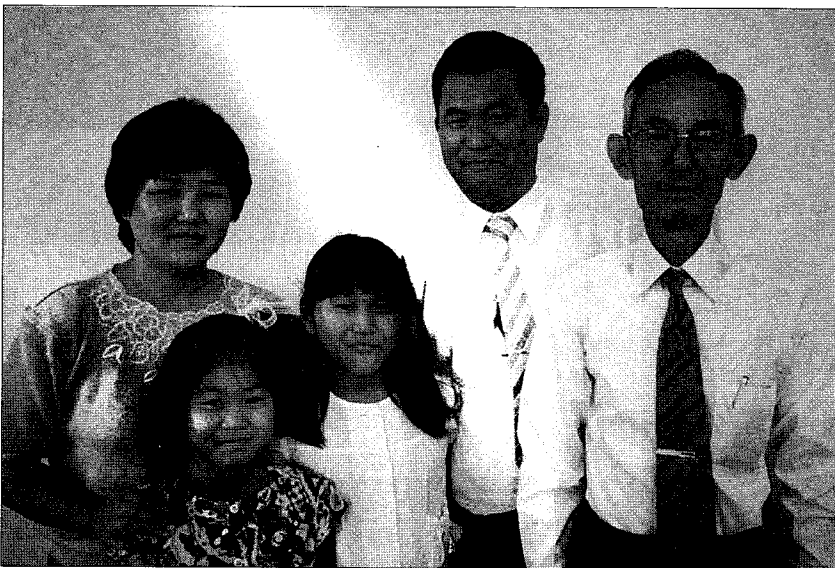
今まで攻撃してきた敵が急に戦ってなくなり、それで不思議に思い偵察に行きました。すると彼らは爆竹を鳴らしお祭り騒ぎをしていました。それから3日後、敵の軍から戦争が終わったことを知らされました。その後しばらく捕虜生活を送っていましたが、翌21年帰国しました。神奈川県浦賀に上陸して復員手続きを済ませ、故郷の名古屋に帰りました。しかし、そこはすでに見渡すかぎりの焼け野原でした。私は自分の家がどこに建っていたのかもわかりませんでした。それから大阪に向かいました。大阪も戦争で破壊されていました。そんな廃虚の街を歩いていますと、道端に年取った女性がうずくまっていた。声をかけ事情を聞いてみますと、ここ数日間何も食べていないとのことでした。私はその老女に、浦賀に上陸した時政府の事務所でもらったお米と食券を差し上げました。そして仕事を探し、しばらく九州の炭鉱で働いていました。数年後再び大阪に戻り、今度は建築現場で働きま

した。生活も少し安定してきました。そんな時、戦後の混乱の中で両親をなくして一生懸命に生きているひとりの女性と出会いました。その女性と結婚し、以来47年間、1男1女を授かり、日々の暮らしに苦しむ時もありましたが、私は私なりに自分の家庭を作り、肉親の愛を得、その愛に満足しながら暮らしてきました。

そんな私の家庭にひとつの変化が起きました。それは長男の結婚です。嫁は旧姓を野木久美子といい、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であることを息子から聞かされました。私は無宗教でしたが宗教に対する偏見はありませんでしたので、喜んで彼女を長男の嫁として迎えました。それから7年目、我が家に大きな変化が起きました。それは私同様無宗教であった息子が突然、酒、たばこ、コーヒー、お茶などを断って、短期間のうちに「知恵の言葉」という教えをマスターし、バプテスマという儀式を受け、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になったことです。私は驚きました。「息子を改宗させた神様は、一体どんな方だろうか。」私は驚きとともにその神様に強い関心を持ちました。

それから5年間、私はキリストの教えを研究してみました。またいろいろなキリスト教会にも行って見ました。その結果私は、キリストの教えの本質は愛ではないだろうかと思うようになりました。そして、その愛をいちばん強く感じる教会はどこかと調べて見ました。そして私が得た結論は、それは息子夫婦が行っている末日聖徒イエス・キリスト教会ではないだろうかということでした。私がある教会に行った時、そこには荘厳な音楽が流れていました。また別の所では、美しいステンドグラスの絵と光が、室内を照らしていました。しかし私はキリストの愛

鬼頭ご家族





をいちばん強く感じる教会は、末日聖徒イエス・キリスト教会であると結論を出しました。

それから私は宣教師から福音を学ぶことになりました。私は宣教師によって、神の存在と主の福音について教えられました。私が子供の時からあこがれ大切に育ててきた家庭の愛、親の愛よりも、もっともっと大きな神様の愛があることを宣教師によって学びました。私に神様を教え、神様の大きな愛を教えてくださいました多くの宣教師たちに深く感謝しています。私は教えられることを頭では理解できましたが、70年という長い年月を経て身についた風習、思想、習慣は、一朝一夕に変えることはむずかしく、宣教師に会ってから改宗するまでに5年という長い年月を費やしてしまいました。そんな時モルモン經のニーファイ第二書第27章35節にある「精神に過ちを犯したる者たちは悟ることを得、不平を言ひし者たちは教義を学ぶことを得ん」という言葉に強く心を打たれました。短い聖句ですが、当時の私にとってはほんとうにぴったり当てはまる言葉のような気がしました。頑強な私ですが、教会に行くとき教会員の皆様は温かく歓迎し、深い思いやりのある愛の祝福を注いでくださいました。深く心から感謝しています。私が子供のころからあこがれ、また大切に育ててきました肉親の愛、家庭の幸福とは、一体何だったのだろうかと思った時があります。今は、家族の者がみんなひとつの望みを持ってひとつの信仰に団結し、一生懸命互いに助け合いながら補い合いながら支え合って福音の生活を送ることの中には、真の家族としての愛と幸福があるのではないだろうかと思っています。

今年の1月、息子夫婦が東京神殿へ参入するというので、私も同行することにしました。関西を夜出発し、東京神殿には朝5時ごろ着きました。辺りはまだ暗闇に包まれていました。そんな中で神殿を見上げた時、搭がまるで天にまで届いているように感じました。

私はまだすべての儀式を受けることはできませんが、死者のバプテスマを受けることができました。バプテスマを受ける衣服に着替え、順番を待ちま

した。そして、いよいよ自分の番になりました。私は儀式を施す人に導かれ、死者の身代わりとして水の中に入りました。そして儀式が始まりました。ひとり目、ふたり目と水の中に沈みました。最初は緊張していたせいかよくわかりませんでした。3、4人目になった時、私はバプテスマの水槽のそばにテレビが置いてあるのに気がつきました。そして、その画面には、身代わりになる死者の名前が映し出されていることにも気がつきました。私は、その画面の名前をハッキリと読み取ることができました。しかし、これは私にとってまったく不思議なことでした。私はいつも眼鏡を掛けて生活しています。家でテレビを見る時も眼鏡を掛けないとハッキリ見ることはできません。しかし、その眼鏡はバプテスマの儀式で水に沈むので、前もって外してしまいました。そんな眼鏡なしの状態テレビの文字を読み取ることができた自分に、私はとても驚きました。それからは、画面に映る死者の名前を、一人一人心に刻み込みながら儀式を受けました。すると今度は、自分が水の中から起き上がる瞬間、自分のすぐそばを、何か急に飛び立って行くような感触を受けました。そして、その後とても温かいものが自分を包み込むのも感じま

した。その何かが飛び立つ感触と、温かいものに包まれる不思議な感触は、儀式をひとり終えるごとにやって来ました。そうして十数人の身代わりの儀式が終わりました。私が水から上がりますと、嫁が心配して待っていました。年取った父が何回も水の中に沈んだので、体を冷やしてしまったのではないだろうか心配して、暖かい着替えを持って待っていました。私は嫁に、水槽の中で体験したあの不思議な温かい出来事を話して安心させました。

神様は、ひとりの女性を通じて、私たちに永遠の喜びを知らせてくださいました。もし息子が、嫁である久美子姉妹と結ばれていなかったら、教会員としての息子、鬼頭和則兄弟の存在はなかっただろうと思います。また、孫娘、愛子、純子のふたり姉妹にも恵まれず、ましてや教会員として今証<sup>あかし</sup>できる私自身も存在しなかったことと思います。神様が私たち一家にお与えくださいました大きな祝福に、深く心から感謝をいたします。かたくなな私を、長い間支え助けてくださいました私の家族にも心から感謝をするとともに、一教会員として証できますこの喜びを家族とともに分かち合いたいと思っています。(きとう・すすむ 支部書記補助)

## チャーチニュース

### ルワンダでの教会の救援活動

**大** 管長会の指示を受けて準備された76万ドル相当の救援物資が、著名な国際的救援団体との綿密な協力体制の下に、教会職員の手を経てルワンダに支給された。

この救援物資は、ルワンダを深刻な危機が襲い始めた数週間前に承認されたもので、内訳は下記のとおりである。

●約55万ドルに相当する基礎的な食糧や医療品、衣料、毛布を全部で約32万ポンド(約145トン)。(ルワンダ周辺地区数カ所には、こうした種類の物資が大量に保管されているとの連絡を受けたが、必要に応じて教会の

救援物資が調達されることになっている)

- 教会から寄付された食糧やその他の物資の輸送用資金に現金10万ドル。
- その他の寄付による物資の輸送用資金に現金10万ドル。
- 1万ドル相当の緊急医薬品および石けん。

教会のルワンダでの援助は、現在進展中の救援活動プログラムの一環である。最近、教会の人的、経済的、その他の資源が、合衆国内の多くの州ならびに世界50カ国以上のさまざまな組織やプロジェクトへ提供されている。□

# 8月に召された専任宣教師

第180期生 11人

## 新刊紹介



ハワード・W・ハンター大管長の写真

28×21.5cmカラー

カタログ番号 86258 300 50円

後列左から1-4, 前列左から5-11

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 山田卓二	神戸S/神戸W	仙台伝道部
2. 松藤慎一	大阪堺S/和歌山W	名古屋伝道部
3. 渋谷彰	仙台S/山形W	神戸伝道部
4. 伊藤義治	仙台S/泉W	神戸伝道部
5. 熊谷早余子	仙台S/青葉W	岡山伝道部
6. 鈴木香織	仙台S/上杉W	大阪伝道部
7. 竹村清美	京都S/伏見W	札幌伝道部
8. 佐倉井香澄	横浜S/大船W	名古屋伝道部
9. 深沢まり	仙台M/盛岡D/盛岡B	札幌伝道部
10. 川崎真恵	札幌西S/藻岩W	東京北伝道部
11. 伊礼みわこ	沖縄那覇S/首里W	大阪伝道部

M:伝道部, S:ステーク部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

編集室から

## 皆さんの原稿を募集しています

▶ご投稿の際には連絡先(住所、電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名と併せて生年を明記し、写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただいたり、掲載までに時間がかかる場合もありますので、ご了承ください。

▶あて先:

〒106 東京都港区南麻布5-10-30  
末日聖徒イエス・キリスト教会

「聖徒の道」編集室

電話 03(3440)2666

FAX 03(3440)3275

お知らせ

## 役員の変動

1994年7月5日から8月2日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 札幌西ステーク部函館支部  
新支部長:富士勝夫  
(前任者:篠原英彦)
- 横浜ステーク部大船ワード部  
新監督:長濱修  
(前任者:佐倉井正彦)

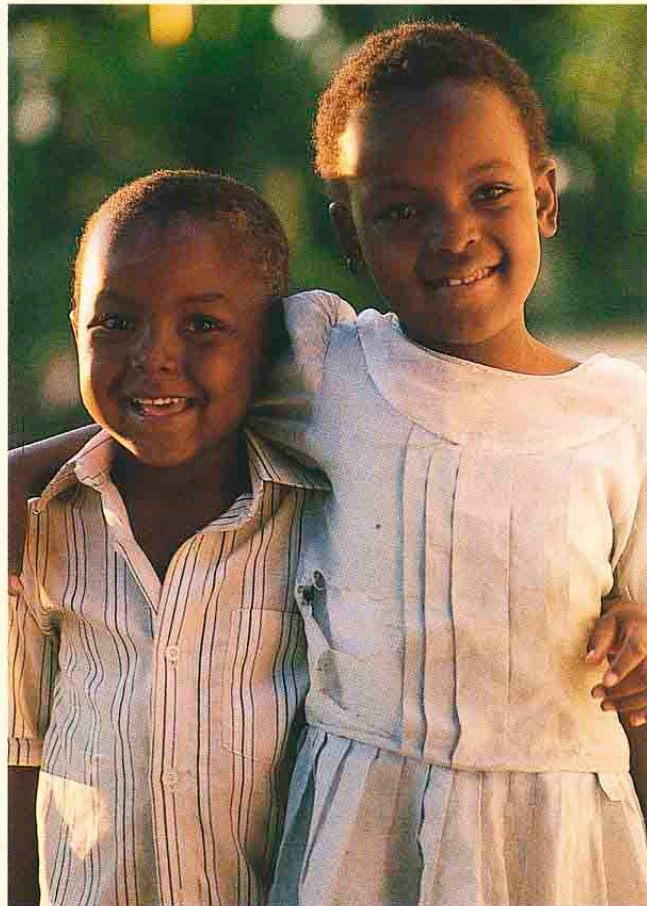




「ハマンを訴えるエステル」 アーネスト・ノーマンド画

ペルシャの王、アハシュエロスの下で大臣の長を務めるハマンは、個人的な憎悪から偽りを申し立て、すべてのユダヤ人を滅ぼすという勅命を得た。王妃エステルはユダヤ人であったが、王はそれを知らなかった。自分の民を救うため、エステルは命を危険にさらして、自分がユダヤ人であることを王に明かし、ハマンのたくらみを訴えた。(エステル7章参照)





「子供は……まさしく愛そのものであり、困難で混乱したこの世にあって、真の希望と喜びでもあります。」1994年1月、ゴードン・B・ヒンクレー副管長は教会全体に向けた衛星中継放送で、そう語った。（本誌『汝ら<sup>なんじ</sup>の子供たちを見よ』p.35参照。写真撮影／ラッセル・D・ホルト）